九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[028]報告

脇坂, 真彩子
九州大学留学生センター : 講師

大神, 智春
九州大学留学生センター : 准教授

郭, 俊海
九州大学留学生センター : 教授

斉藤, 信浩
九州大学留学生センター : 准教授

他

https://doi.org/10.15017/4783553

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 28, pp.83-170, 2020-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，83－
94 Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 83-94

Japanese Academic Courses（JACs）／言語文化基礎科目・日本語

Japanese Academic Courses (JACs) / Fundamental Subjects for Language and Culture, Japanese

脇　坂　真彩子*

１．はじめに

「Japanese Academic Courses ／言語文化基礎科目・日本語（以下、JACs)」は九州大学伊都キャンパスで開講される単位取得を目指す学部留学生向けの日本語コースである。総合日本語（I コース)、漢字（K コース)、会話（S コース)、作文（W コース）の４つのコースから構成され、入門から上級まで８段階の幅広いレベルのクラスが展開されている。JACs は2018年度に基幹教育の「言語文化基礎科目」となり、クオーター制で開講され、各クオーター履修後には九州大学から成績と１単位が授与されることとなった。現在、九州大学の学部正規留学生（共創学部および農学部・工学部学士課程国際コース：IUPE に所属する学生を含む)、留学生センターが提供するプログラム（Japan in Today's World Program：JTW、日本語・日本文化研修コース：JLCC、日本語研修コース、日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム）の参加学生、大学間・部局間交流協定に基づく交換留学制度を通じて留学し各学部に所属する交換留学生が本コースを受講している。2018年３月に伊都キャンパスへの総移転が完了し、2019年度春学期より JACs のすべてのクラスが伊都キャンパスセンター５号館で開講されている。以下に、2019年度（令和元年度）の実施状況を報告する。

２．コースの概要

２．１．JACs のコース編成

本コースは総合日本語（I コース)、漢字（K コース)、会話（S コース)、作文（W コース）の４つのコースから成る。表１は2019年度春学期（Quarter 1）と夏学期（Quarter 2）のコース編成を、表２は秋学期（Quarter 3）と冬学期（Quarter 4）のコース編成を示している。１コマ90分の構成であり、クオーター制に基づき、各クオーターで週に２回を7.5週、計15回授業が行われる。括弧内の数字はクラス数を示している。なお、各クラスの科目名は留学生センターと基幹教育で異なっているが、本稿では留学生センターで使用している科目名を使用する。科目名の一覧表は本稿稿末を参照されたい。

* 九州大学留学生センター講師

表１　コース編成（2019年度春学期・夏学期）

レベル	総合（Ｉコース）	漢字（Ｋコース）	会話（Ｓコース）	作文（Ｗコース）
上級	I-8（1）	K-8（1）	S-8（1）	W-8（1）
上級入門	I-7（1）	K-7（1）	S-7（1）	W-7（1）
中級2	I-6（2）	K-6（1）	S-6（1）	W-6（1）
中級1	I-5（2）	K-5（1）	S-5（1）	W-5（1）
中級入門	I-4（2）	K-4（1）	S-4（1）	
初級2	I-3（2）	K-3（1）	S-3（1）	
初級1	I-2（2）	K-1+2（1）	S-2（1）	
入門	I-1（2）			

表2　コース編成（2019年度秋学期・冬学期）

レベル	総合（Ｉコース）	漢字（Ｋコース）	会話（Ｓコース）	作文（Ｗコース）
上級	I-8（1）	K-8（1）	S-8（1）	W-8（1）
上級入門	I-7（2）	K-7（1）	S-7（1）	W-7（1）
中級2	I-6（1）	K-6（1）	S-6（1）	W-6（1）
中級1	I-5（2）	K-5（1）	S-5（1）	W-5（1）
中級入門	I-4（2）	K-4（1）	S-4（1）	
初級2	I-3（2）	K-3（2）	S-3（1）	
初級1	I-2（2）	K-1+2（2）	S-2（1）	
入門	I-1（2）			

２．２．使用教材

各クラスでの使用教材は表３の通りである。

表3　各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
I-1	『初級日本語げんきⅠ（第２版）』	K-1+2	『Essential Japanese Kanji vol.1』 『げんきⅠ（第２版）』
I-2	『初級日本語げんきⅠ，Ⅱ（第２版）』		
I-3	『初級日本語げんきⅡ（第２版）』	K-3	『Basic Kanji Book vol.1』
I-4	『中級へ行こう（第２版）』	K-4	『Basic Kanji Book vol.1、vol. 2』
I-5	『中級を学ぼう（中級前期）』	K-5	『Basic Kanji Book vol. 2』
I-6	『中級を学ぼう（中級中期）』	K-6	『上級へのとびら きたえよう漢字力』
I-7	『日本語５つのとびら TOBIRA 中上級編』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
I-8	自主作成教材を使用	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
会話	使用教材	作文	使用教材
S-2	『聞く・考える・話す　留学生のための初級日本語会話』	W-5	『表現テーマ別にほんご作文の方法』
S-3	『聞く・考える・話す　留学生のための初級日本語会話』	W-6	『小論文の12のステップ』

S-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	W-7	『この一冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』
S-5	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』（春学期・夏学期） 自主作成教材（秋学期・冬学期）	W-8	自主作成教材を使用
S-6	『日本語上級話者への道』		
S-7	自主作成教材を使用		
S-8	自主作成教材を使用		

2．3．学生区分／所属別の受講可能コース

JACsでは学生の区分・所属によって、受講できるコースやレベルに制限がある。表４に学生区分／所属別の受講可能コースを示す。表内の「◯」はプレースメントテストを受験した上で、そのコースを受講できることを示し、「×」はそのコースが受講できないことを示している。ただし、共創学部（秋入学）およびIUPE以外の学部に所属する正規留学生はプレースメントテストなしで特定のクラスを受講することになっているため、表内にそのクラスを示している。

表4　受講可能コース一覧

学生区分／所属	Ｉコース	Ｋコース	Ｓコース	Ｗコース
留学生センター生 （JTW、JLCC、研修、日韓）	◯	◯	◯	◯
学部所属交換留学生	◯	◯	◯	◯
農学部・工学部国際コース（IUPE）1年生	◯	◯	×	×
農学部・工学部国際コース（IUPE）2年生	◯	×	×	×
共創学部（春入学）	I-6（Q1&2） I-7（Q3&4）	×	×	×
共創学部（秋入学）	◯	◯	◯	◯
共創学部・IUPE以外の学部正規留学生	I-6（Q1&2） I-7（Q3&4）	×	×	×

2．4．開講日程

2019年度の各クオーターの開講日程は以下、表５の通りである。

表５　授業の開講スケジュール

クオーター	開講期間
春学期（Quarter 1）	2019年 4月 9日　～　2019年 6月 5日
夏学期（Quarter 2）	2019年 6月11日　～　2019年 8月 1日
秋学期（Quarter 3）	2019年10月 8日　～　2019年11月29日
冬学期（Quarter 4）	2019年12月 4日　～　2020年 2月 7日

2．5．履修開始までの手続き

JACs の履修には履修希望者本人が春学期（Q1）と秋学期（Q3）の初めに、オンラインによる受講申し込みを行う必要がある。その後の履修開始までの手続きは学生区分／所属によって異なっている。各クオーターのオンライン受講申し込み期間とプレースメントテストの受験期間は表６の通りである。

表6　プレースメントテストとオリエンテーションの日程

クオーター	オンライン受講申し込み及び オンラインプレースメントテスト	漢字テスト	インタビューテスト	オリエンテーション
春学期（Q1）	2019年 3月28日～2019年 4月 2日	4月4日		－
夏学期（Q2）	2019年 6月 6日～2019年 6月 7日	6月7日	－	－
秋学期（Q3）	2019年 9月17日～2019年 9月26日	10月3日		
冬学期（Q4）	2019年11月30日～2019年12月 1日	12月 2日	－	－

2018年度のコース統合に伴い、全学生が使用できるオンラインシステムが必要となったが、現在開発中のため、2019年度のオンライン登録およびプレースメントテストは既存の５つのシステムを駆使して行った。以下に、学生区分／所属ごとの受講申込みから履修開始までの手続きについて説明する。

2．5．1．留学生センター生および学部所属交換留学生

留学生センター生および学部所属交換留学生は、2017年度まで留学生センターで使用していたオンラインシステムを継続して、オンラインの受講申し込みとプレースメントテストを行った。まず、受講申込者はオンラインで申し込み手続きを完了後、希望するコースと前の学期の履修状況に応じて、必要なプレースメントテストを受験した。プレースメントテストでは、まず全コースの履修に必須の文法・聴解・読解のテストがオンラインシステムを使用して行われ、その後、K コースおよび W コースの履修希望者には筆記による漢字テスト、S コースの履修希望者にはインタビューテストが対面で実施された。システムエラーや諸事情でオンラインテストが受けられなかった学生は、オンラインのバックアップテストを受験した。クラス分け結果は学期開始前に留学生センターのオンラインシステムを通じて通知され、学生は結果に従ってクラスの受講を開始した。

2．5．2．農学部・工学部の学士課程国際コース（IUPE）

農学部・工学部の学士課程国際コース（IUPE）１年生は2019年度秋学期に暫定的に設けられた２つのシステムを使用して表６に示す所定の期間に、オンラインで受講申し込みとプレースメントテスト（文法・聴解・読解）の受験を行った。その上で、JACs の全体オリエンテーションに参加後、筆記による漢字テストを受験した。２年生は前学期に受講したコースの成績に基づいて、受講クラスが決定された。クラス分けの結果は、学期開始前に学生ポータルシステムを通じて通知され、学生は結果に従ってクラスの受講を開始した。

２．５．３．学部正規留学生（IUPE および共創学部（秋入学）以外）

学部正規留学生はプレースメントテストなしで特定のクラスを受講することになっているため、履修開始前には受講登録のみを行う。2019年度は暫定的に設けられた「クラス分けシステム」というオンラインシステムを使用して受講登録を行った。春学期については、学生は所定の期間に「クラス分けシステム」で受講登録を行った後、基幹教育で実施される日本語履修のオリエンテーションに参加した。一方、秋学期は、所定の期間に「クラス分けシステム」でコースを登録後、学生は基幹教育事務担当者からメールで通知された情報に従って初回の授業に参加した。そして、初回の授業の冒頭でJACs の履修規定等についてオリエンテーションを受け、学生ポータルシステムへの履修登録を行った。

２．５．４．共創学部生

共創学部生は春入学生と秋入学生で日本語の履修単位数や履修のプロセスが異なっている。春入学の学生は2. 5. 3. 項で述べたように、プレースメントテストなしで特定のクラスを受講することになっており、2019度春学期（Q1）と夏学期（Q2）は I-6（Integrated Courses: Intermediate 2 A, B）を受講し、秋学期（Q3）と冬学期（Q4）は I-7（Integrated Courses: Pre-Advanced A, B）を受講した。一方、秋入学の学生は学生本人が I、K、S、W の４つのコースの中から希望するコースを選択し、選んだコースによって必要なプレースメントテストを受験した。受講プロセスは2. 5. 1. 項に記した留学生センター生および学部所属の交換留学生と同様である。

２．６．夏学期（Quarter 2 ）と冬学期（Quarter 4 ）のプレースメントテスト

夏学期（Q2）と冬学期（Q4）のプレースメントテストは留学生センターが提供するプログラムに所属する学生（JTW、日本語研修コース、日韓プログラム）と学部所属交換留学生のみを対象に実施した。JACs は４つのクオーターから構成されるが、カリキュラムの内容は学習効果を考慮して、学期ごと（春学期（Q1）と夏学期（Q2）、もしくは秋学期（Q3）と冬学期（Q4））に連続しているため、受講生は基本的に２学期を通して同じレベルのクラスを履修する。しかし、上に挙げた対象学生は、在籍期間が半年～１年と短いため、学習意欲の高い学生の動機付けになるように上のレベルに移動できるチャンスを設けているのである。2019年度夏学期（Q2）は、I コースと K コース、冬学期（Q4）は I コース、K コース、S コースを対象にプレースメントテストを実施した。受験条件は前のラウンドでクイズの平均点および期末テストの点数が90% 以上取れていることとし、これらの２つの条件を満たした学生はプレースメントテストを受験した。

３．履修者

３．１．履修者数

2019年度春学期（Q1）の最終履修者数は134名（延べ266名）、秋学期（Q3）の最終履修者数は、154名（延べ303名）であった。春学期と秋学期のクラス別履修者数を表７と表８に示す。

表7　2019年度春学期（Q1）クラス別履修者数（延べ履修者数）

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">総合コース</th><th colspan="2">漢字コース</th><th colspan="2">会話コース</th><th colspan="2">作文コース</th></tr>
<tr><td>上級</td><td>I-8</td><td>8</td><td>K-8</td><td>6</td><td>S-8</td><td>5</td><td>W-8</td><td>4</td></tr>
<tr><td>上級入門</td><td>I-7</td><td>8</td><td>K-7</td><td>6</td><td>S-7</td><td>4</td><td>W-7</td><td>7</td></tr>
<tr><td>中級２</td><td>I-6</td><td>34</td><td>K-6</td><td>8</td><td>S-6</td><td>10</td><td>W-6</td><td>3</td></tr>
<tr><td>中級１</td><td>I-5</td><td>12</td><td>K-5</td><td>8</td><td>S-5</td><td>12</td><td>W-5</td><td>5</td></tr>
<tr><td>中級入門</td><td>I-4</td><td>15</td><td>K-4</td><td>13</td><td>S-4</td><td>6</td><td colspan="2" rowspan="4"></td></tr>
<tr><td>初級２</td><td>I-3</td><td>9</td><td>K-3</td><td>19</td><td>S-3</td><td>9</td></tr>
<tr><td>初級１</td><td>I-2</td><td>18</td><td rowspan="2">K-1+2</td><td rowspan="2">4</td><td>S-2</td><td>10</td></tr>
<tr><td>入門</td><td>I-1</td><td>5</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="9">総計　248名</td></tr>
</table>

表8　2019年度秋学期（Q3）クラス別履修者数（延べ履修者数）

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">総合コース</th><th colspan="2">漢字コース</th><th colspan="2">会話コース</th><th colspan="2">作文コース</th></tr>
<tr><td>上級</td><td>I-8</td><td>2</td><td>K-8</td><td>4</td><td>S-8</td><td>10</td><td>W-8</td><td>6</td></tr>
<tr><td>上級入門</td><td>I-7</td><td>25</td><td>K-7</td><td>12</td><td>S-7</td><td>8</td><td>W-7</td><td>4</td></tr>
<tr><td>中級２</td><td>I-6</td><td>3</td><td>K-6</td><td>9</td><td>S-6</td><td>10</td><td>W-6</td><td>9</td></tr>
<tr><td>中級１</td><td>I-5</td><td>16</td><td>K-5</td><td>11</td><td>S-5</td><td>8</td><td>W-5</td><td>7</td></tr>
<tr><td>中級入門</td><td>I-4</td><td>10</td><td>K-4</td><td>11</td><td>S-4</td><td>7</td><td colspan="2" rowspan="4"></td></tr>
<tr><td>初級２</td><td>I-3</td><td>27</td><td>K-3</td><td>19</td><td>S-3</td><td>9</td></tr>
<tr><td>初級１</td><td>I-2</td><td>16</td><td rowspan="2">K-1+2</td><td rowspan="2">29</td><td>S-2</td><td>8</td></tr>
<tr><td>入門</td><td>I-1</td><td>23</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="9">総計 303名</td></tr>
</table>

なお、夏学期（Q2）は、４名がプレースメントテストの受験を希望し、そのうち２名が上のレベルへ移った。冬学期（Q4）の受験希望者は９名で、そのうち４名がプレースメントテストを受験し、最終的に２名が上のレベルへ移った。また、Ｓコースを受講する１名の学生からレベルダウンの希望があったため、この学生には特別にインタビューテストを受けさせ、一つ下のレベルへ移動することを許可した。

３．２．履修者の内訳（出身地域別）

表９は履修者を出身地域・国籍別にまとめたものである。履修者の出身地域はヨーロッパ、アジア、南北アメリカ、オセアニア、アフリカと様々である。

表9　出身地域別の履修者数

アジア	春学期	秋学期
大韓民国	35	34
中華人民共和国	20	21
インドネシア共和国	6	15
台湾	4	13
タイ王国	5	8
インド	1	3
マレーシア	1	3
香港	3	2
日本国	1	2
フィリピン共和国	1	2
ベトナム社会主義共和国	2	2
パレスチナ	1	1
モンゴル国	1	1
シンガポール共和国	3	0
小計	85名	107名

北アメリカ	春学期	秋学期
アメリカ合衆国（米国）	6	9
小計	6名	9名
中南米	春学期	秋学期
エクアドル共和国	0	1
グアテマラ共和国	0	1
ブラジル	2	0
コスタリカ	1	0
小計	3名	2名

ヨーロッパ	春学期	秋学期
フランス共和国	10	11
英国	6	7
ドイツ連邦共和国	4	9
スウェーデン王国	4	1
イタリア共和国	2	0
ベルギー王国	1	1
オランダ王国	1	1
アイルランド	1	0
ブルガリア共和国	1	0
オーストリア共和国	0	2
リトアニア共和国	0	1
トルコ共和国	0	1
小計	30名	34名

オセアニア	春学期	秋学期
オーストラリア連邦	1	1
小計	1名	1名
アフリカ	春学期	秋学期
エジプト・アラブ共和国	2	0
タンザニア連合共和国	1	1
アルジェリア	1	0
小計	4名	1名
合計	129名	154名

3．3．履修者の内訳（身分・所属別）

表10と表11は、春学期（Q1）と秋学期（Q3）の身分・所属別の履修者数を学期ごとにまとめたものである。

表10　春学期（Q1）身分・所属別の履修者数

留学生センター生	73名
Japan in Today's World（JTW）	44
日本語・日本文化研修コース（JLCC）	19
日本語研修コース	10

学部正規留学生	24名
学部正規留学生	24
農学部・工学部国際コース（IUPE）	16名
工学部１年生	13
農学部１年生	3
共創学部	8名
2018年度春入学生	4
2018年度秋入学生	4
学部別所属交換留学生	8名
文学部	3
経済学部	2
法学部	2
理学部	1
計	129名

表11　秋学期（Q3）身分・所属別の履修者数

留学生センター生	68名
Japan in Today's World（JTW）	35
日本語・日本文化研修コース（JLCC）	22
日本語研修コース	4
日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム	7
農学部・工学部国際コース（IUPE）	47名
工学部１年生	21
農学部１年生	10
工学部２年生	13
農学部２年生	3
共創学部	13名
2018年度秋入学生	4
2019年度春入学生	4
2019年度秋入学生	5
上記以外の学部正規留学生	16名
学部正規留学生	16
学部所属交換留学生	10名
工学部	3
文学部	2
経済学部	2
法学部	2
理学部	1
計	154名

4．2019年度に行った改善

JACs は2018年度に基幹教育の日本語科目および農学部・工学部学士課程国際コース（IUPE）の日本語科目と統合し、基幹教育「言語文化基礎科目・日本語」となった。表12に示すように、2019年度秋学期には、共創学部と IUPE の２年生が JACs を受講するようになり、ようやく対象となるすべての学生が JACs を受講するようになった。また、2018年３月に箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転が完了し、2019年度春学期からは JACs の授業をセンター５号館で行う体制になった。

表12　2018年度～ 2019年度の受講者の身分と所属

		2018年度		2019年度	
		Q1&Q2	Q3&Q4	Q1&Q2	Q3&Q4
協定校からの交換留学生		○	○	○	○
	留学生センター所属の学生（JTW、JLCC、研修、日韓）	○	○	○	○
	学部所属交換留学生	○	○	○	○
学部正規留学生		○	○	○	○
	農学部・工学部学士課程国際コース（IUPE）１年生		○	○	○
	農学部・工学部学士課程国際コース（IUPE）２年生				○
	共創学部 １年生	○	○	○	○
	共創学部 ２年生				○
	上記以外の学部		○	○	○

今年度は2018年度の反省を踏まえて、以下のような３つの改善を行なった。

4．1．プレースメントテストのスケジュールとオリエンテーションのやり方の見直し

学期開始前の受講の手続きについては、おもに以下の２点を見直した。

第一に、秋学期の受講申し込み及びプレースメントテストのスケジュールを見直した。2018年度は９月下旬にオリエンテーションとオンサイトのプレースメントテストを実施したため、夏期休暇中に帰国している学生が参加できず、個別対応しなくてはならなくなった。そこで、2019年度秋学期は９月中旬～下旬にオンライン受講申し込みとプレースメントテストを実施した後、秋学期開始後の10月第１週目にオリエンテーションと漢字テスト、インタビューテストを実施することにした。これにより、夏期休暇中の帰国によりオリエンテーションやオンサイトのプレースメントテストに参加できない学生はいなくなった。また、スケジュールの変更により、判定とクラス分けの作業に時間的な余裕ができ、昨年度夜間にまで及んだ関係者の負担が緩和され、より正確な判定ができるようになった。

第二に、学部正規留学生のオリエンテーションを初回の授業の冒頭に行うこととした。2018年度は JACs の全体オリエンテーションへの参加を義務付けていたが、学部正規留学生はプレースメントテストが不要であるため、初回の授業でオリエンテーションを実施した方が学生の負担が少ないと考えたためである。JACs コーディネーターが初回の授業に行き、オリエンテーションと履修登録確認を行

うことで、事務作業も効率化した。

4．2．K1＋2とK3のクラス増設

2019年度秋学期からK1+2とK3のクラス数を２クラスに増やした。2018年秋学期からIUPE生と共創学部（秋入学）生がKコースを受講するようになった結果、K1+2とK3の人数が定員を超える事態が発生したためである。2019年度はIUPE生が32名となり、昨年より倍増しため、クラスを増設することにした。プレースメントテストの結果、K1+2はaクラス14名、bクラス15名、K3はaクラス11名、bクラス８名となり、クラス運営に適切な人数になった。

4．3．コース評価アンケートの実施

2018年度までは、留学生センター所属の学生を対象としたオンラインシステムで授業評価アンケートを実施していた。しかし、留学生センター以外の所属の学生はこのシステムを使用することができないため、統合後は全学生に対してコース評価を実施することができなくなっていた。そこで、新規システムが完成するまでの間、google formを使用した暫定的なwebアンケートページを作成し、コース評価を実施することにした。回答率が低いコースがあることが課題であるが、JACsを受講するすべての学生を対象とした授業評価を実施できるようになったことで、コース全体がどのように学生に捉えられていたかが把握でき、今後のコース改善につながった。また、クラス毎に個別のフィードバックができるようになり、各担当教員から授業改善に役立つという意見をいただいた。

5．今後の課題

今後の課題として、以下の４点を挙げる。

5．1．新規オンライン受講申し込み・プレースメントテストシステムの構築

2019年度まではJACsと基幹教育の日本語科目および農学部・工学部学士課程国際コースの日本語科目が統合して間もないため、移行措置として暫定的な５つのオンラインシステムを使用して、受講登録とクラス分けの作業を行ってきた。しかし、2020年度からは全ての受講者がオンラインで受講申込みとプレースメントテストの受験を行えるシステムを開発し、運用する予定である。新システムでは、これまでのコース運営上の問題点を踏まえてシステムを開発したいと考えている。主な変更点は次の２点である。

1）JACsの受講登録とプレースメントテストは学期開始前に行われるが、新入生の学生番号の発行が学期開始後になるケースがあり、その場合は仮IDを発行して対応していた。この問題を解決するため、新システムでは、学生番号がない学生も受講登録とプレースメントテストの受験ができるようにする。

2）従来のシステムでは受講希望コースを選択後にプレースメントテストを受験するという流れであった。このため、初級レベルの学生が、中級レベル（W-5）以上の学生しか受講できない作文コー

スを選択した結果、受講できるコースが希望よりも少なくなってしまうことがあった。そこで、新システムでは、まずプレースメントテストを受験し、その結果に基づいて受講できるコースが表示され、その中から学生が希望するコースを選択するという流れにする予定である。

そのほかにも、統合後のコース運営の反省点を踏まえて、より良いシステムにできるよう検討していく予定である。

5．2．Speaking Courses：Elementary 1A/ 1B（S-2）の基幹教育科目への承認

現在、JACs 科目の中で Speaking Courses：Elementary 1A/ 1B（S-2）は唯一基幹教育科目となっていない。このため、学部所属の交換留学生や共創学部生がこのクラスを受講した場合は、九州大学からの正式な成績と単位を出すことができない。そこで、このような場合は、S-2を留学生センターの科目として扱い、各学期終了後に留学生センター委員会で成績及び単位認定を行なっている。今後、他の科目と同様に S-2も基幹教育科目に追加してもらい、成績と単位が九州大学から授与できるように働きかけていくつもりである。

5．3．春入学の共創学部生と学部正規留学生のクラスの授業内容の見直し

2. 3. 項に示したように、春入学の共創学部生と学部正規留学生は、プレースメントテストなしで特定のクラスを受講することになっている。これは学部に入学する留学生の日本語レベルが均一であると想定されてのことである。しかし、実際には学生の日本語レベルにばらつきが非常に大きく、2019年度は初級後半～上級レベルまで様々なレベルの学生が同じクラスで学ぶという状況が発生していた。本来であれば、学生が自分の日本語レベルにあったクラスを受講するのが望ましい。今後は、他の身分／所属の学生と同様に、学期開始前にプレースメントテストを実施し、レベルにあったコースを受講してもらえるよう働きかけていきたい。

5．4．様々な背景を持つ学習者への対応

ここ数年、JACs の受講生の背景が多様化している。両親が日本人であるが外国で育った学生や、幼少期を日本で過ごした学生、日本語教育機関では学習歴はないがインターネットやアニメ・漫画等から日本語を独学で学んだ学生などである。これらの学生には４技能にバラつきがあることが多く、日本語のクラスの進め方が合わなかったりすることがある。多様な背景を持つ学習者は今後も増えていくことが見込まれる。このような学生が日本語能力をバランスよく高めていくために教師が教室内外でどのようにサポートできるか考える必要があると思われる。

参考文献

斉藤信浩（2016）「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」『九州大学留学生センター紀要』24, 127-134.
脇坂真彩子（2017）「九州大学留学生のための日本語コース（JACs）」『九州大学留学生センター紀要』25, 131-136.
脇坂真彩子（2018）「九州大学留学生のための日本語コース（JACs）」『九州大学留学生センター紀要』26, 83-88.
脇坂真彩子（2019）「Japanese Academic Courses（JACs）／ 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』27, 79-90.

付録「Japanese Academic Courses（JACs）／言語文化基礎科目・日本語」科目名一覧

留学生センター生	共創学部生・IUPE生・学部所属交換留学生		学部正規留学生
科目名	シラバス上の科目名	略称	シラバス上の科目名
I-1	Integrated Courses：Beginners A	I1A	
	Integrated Courses：Beginners B	I1B	
I-2	Integrated Courses：Elementary 1A	I2A	
	Integrated Courses：Elementary 1B	I2B	
I-3	Integrated Courses：Elementary 2A	I3A	
	Integrated Courses：Elementary 2B	I3B	
I-4	Integrated Courses：Pre-Intermediate A	I4A	
	Integrated Courses：Pre-Intermediate B	I4B	
I-5	Integrated Courses：Intermediate 1A	I5A	
	Integrated Courses：Intermediate 1B	I5B	
I-6	Integrated Courses：Intermediate 2A	I6A	日本語Ⅰ（Q1）
	Integrated Courses：Intermediate 2B	I6B	日本語Ⅱ（Q2）
I-7	Integrated Courses：Pre-Advanced A	I7A	日本語Ⅲ（Q3）
	Integrated Courses：Pre-Advanced B	I7B	日本語Ⅳ（Q4）
I-8	Integrated Courses：Advanced A	I8A	日本語Ⅴ（Q1）
	Integrated Courses：Advanced B	I8B	日本語Ⅵ（Q2）
K-1+2	Kanji Courses：Elementary 1A	K2A	
	Kanji Courses：Elementary 1B	K2B	
K-3	Kanji Courses：Elementary 2A	K3A	
	Kanji Courses：Elementary 2B	K3B	
K-4	Kanji Courses：Pre-Intermediate A	K4A	
	Kanji Courses：Pre-Intermediate B	K4B	
K-5	Kanji Courses：Intermediate 1A	K5A	
	Kanji Courses：Intermediate 1B	K5B	
K-6	Kanji Courses：Intermediate 2A	K6A	
	Kanji Courses：Intermediate 2B	K6B	
K-7	Kanji Courses：Pre-Advanced A	K7A	
	Kanji Courses：Pre-Advanced B	K7B	
K-8	Kanji Courses：Advanced A	K8A	
	Kanji Courses：Advanced B	K8B	
S-2			
S-3	Speaking Courses：Elementary 2A	S3A	
	Speaking Courses：Elementary 2B	S3B	
S-4	Speaking Courses：Pre-Intermediate A	S4A	
	Speaking Courses：Pre-Intermediate B	S4B	
S-5	Speaking Courses：Intermediate 1A	S5A	
	Speaking Courses：Intermediate 1B	S5B	
S-6	Speaking Courses：Intermediate 2A	S6A	
	Speaking Courses：Intermediate 2B	S6B	
S-7	Speaking Courses：Pre-Advanced A	S7A	
	Speaking Courses：Pre-Advanced B	S7B	
S-8	Speaking Courses：Advanced A	S8A	
	Speaking Courses：Advanced B	S8B	
W-5	Writing Courses：Intermediate 1A	W5A	
	Writing Courses：Intermediate 1B	W5B	
W-6	Writing Courses：Intermediate 2A	W6A	
	Writing Courses：Intermediate 2B	W6B	
W-7	Writing Courses：Pre-Advanced A	W7A	
	Writing Courses：Pre-Advanced B	W7B	
W-8	Writing Courses：Advanced A	W8A	日本語Ⅶ（Q1）
	Writing Courses：Advanced B	W8B	

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，95－101
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U., 2020,
No.28, 95-101

日本語研修コース

Intensive Japanese Courses

大　神　智　春*

１．はじめに

日本語研修コースは、大学院に進学する予定の国費研究留学生を主な対象として、来日後の半年間日本語予備教育を集中的に行うコースである。日本語研修コース（以下研修コース）では、初級からの日本語教育、日本事情教育、専門教育の場への適応を促進するための活動、の３点を予備教育として行っている。目標は「会話を中心とした初級日本語を習得させること」、「研究の場において日本人と円滑にコミュニケーションができるようにすること」である。以下に平成30年度（2018年度）の実施状況を報告する。

２．実施概要

平成30年度に Japanese Academic Courses（以下 JACs）が基幹教育言語文化基礎科目「日本語」と統合した。この統合により、JACs の開講期間が半期15週間となったことから、当研修コースも JACs と連動したコース開講期間を設定することになった。平成29年度まではラウンド１～ラウンド４の授業開講期間に加え夏期ラウンド及び冬期ラウンドを設け集中的に授業を行っていたが、平成30年度からはラウンド制を廃止し「前期」「後期」の枠組みの中で授業を実施することになった。

平成30年度研修コースの実施時期、主な日程は下記のとおりである。

１）実施期間　前期　４月９日－９月３日（第66期）
　　後期　10月９日－３月１日（第67期）

２）主な日程

①前期

開講式	４月６日
授業開始	４月９日
研修旅行（防災センター）	４月14日

*九州大学留学生センター准教授

見学旅行（小倉・角島）	５月12日
見学旅行（太宰府）	６月２日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	７月２日
発表会	８月３日
閉講式	９月３日
②後期	
開講式	９月27日
授業開始	10月９日
茶道体験	10月12日
見学旅行（太宰府）	10月27日
見学旅行（熊本・阿蘇）	11月17日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	１月28日
発表会	２月12日
閉講式	３月１日

３）受講者

受講者は、文科省の国費外国人留学生のうち九州大学および北部九州地区の大学へ配属された研究留学生、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生（後期のみ）、学内募集に応募した九州大学の留学生である。

①前期　17名

全員国費外国人留学生である。前期はゼロ初級者が11名、既習者６名だった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。

出身：アイルランド、アメリカ、インドネシア（２名）、エジプト、トンガ、バングラデシュ、ブラジル、ベトナム、ホンジュラス、南アメリカ、ミャンマー、メキシコ（２名）、ラトビア、レバノン、ロシア

進学先：九州大学16名、福岡教育大学１名

②後期　14名

九州大学に進学する研修生が１名、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生が１名、学内募集に応募した九州大学の留学生が12名であった。８名がゼロ初級者、６名が既習者であった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。

出身：アメリカ、インド、韓国、シリア、タイ（２名）、中国（８名）、

進学先：九州大学13名、福岡教育大学１名

4）時間割（ゼロ初級者）

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00		J1		J1	J1
3	13:00-14:30	J1	文化	文化	文化	文化
4	14:50-16:00	J1	S1	K1	S1	K1

3．授業内容

1）授業時間数

前期・後期：各15週間（195時間）

2）使用教材

I-1 ：『初級日本語げんきⅠ』 坂野永理他 The Japan Times
『初級日本語教材げんき　ワークブックⅠ』 坂野永理他 The Japan Times
I-2 ：『初級日本語げんきⅠ』『初級日本語げんきⅡ』 坂野永理他 The Japan Times
『初級日本語教材げんき　ワークブックⅠ』 坂野永理他 The Japan Times
『初級日本語教材げんき　ワークブックⅡ』 坂野永理他 The Japan Times
K-1 ：『初級日本語げんきⅠ　読み書き編』 坂野永理他 The Japan Times
プリント教材
S-1 ：『初級日本語げんきⅠ』 坂野永理他 The Japan Times
プリント教材
文化：自習作成教材

3）授業内容

初心者レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。

I-1 ：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。教科書の第１課から第８課がI-1に該当する。

I-2 ：I-1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にI-2に入る。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。教科書の第９課から第15課が学習範囲である。

S-1 ：I-1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。

K-1 ：ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習（I-1クラス）の進度の後を追う形ですすめる。

文化：①日本の大学や日本社会での生活に適応できる力をつけること、②日本文化と研修生それ

ぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の３点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。
最終発表については、昨年度までは初心者、既習者ともに行っていたが、平成30年度よりJACsの授業期間が変更になったことから既習者の発表準備時間を確保することが困難になった。そのため、初心者のみが最終発表を行うことになった。

４．研修生からの評価

毎学期、コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施している。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。

①前期　８月３日実施　　回答者：17名（ゼロ初級者11名・既習者６名）

a. 日本語のクラスに関して（ゼロ初級者11名が回答）

＊数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	11	0	0	0	0	0
S1	9	2	0	0	0	0
K1	8	3	0	0	0	0
文化	10	1	0	0	0	0

- 最短の時間で最大限の成果が習得できる濃密な授業だった
- 先生が完璧だった。生徒のレベルやペースをよく理解してくれていた。
- 漢字クラスのフラッシュカードは漢字を覚えるのにとても役立った。
- 日本文化を理解でき、そして自己評価を高めることができるので、このような授業はとても重要だと思う。

b. もっと勉強したいこと（ゼロ初級者11名が回答、複数回答可）

文法	会話	漢字	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	発音	単語	読解	筆記	文化	ｽﾋﾟｰﾁ	その他
3	6	5	5	2	4	1	0	2	4	0

c. 授業以外の活動について（全員回答）

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1）小倉城・角島	11	6	0	0	0	0
2）大宰府見学	13	1	3	0	0	0
4）小学校訪問	11	5	1	0	0	0

- このような活動は日本文化や日本の普段の生活を知るためにとても有効だ。
- 活動は私たちの興味を大いに引く内容のものだった。
- 全ての活動が良かったが、中でも特に小学校訪問が良かった。

d.「最終発表会」について（ゼロ初級者11名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
7	4	0	0	0	0

- 自分の国について他の外国人に紹介することができ、また他国の文化も知ることができた。
- 出身国についていろんな人から日本語で尋ねられることが多いので、この機会に考えをまとめることができてよかった。
- 多くの学生や先生の前で発表することができプレゼンのスキルを向上させることができた。

e. コースに対する満足度（全員回答）

90%-100%	15
80% -89%	2
70% -79%	0
50% -69%	0
49% 以下	0

f. コースへの全体の感想（ゼロ初級者、既修者）

- もっとハイペースな授業にしてげんきテキスト本を最後まで終えられたらいいと思う。
- 授業の構成はとても良かったと思うが、漢字クラスのフォローがあればもっと習得しやすかったと思う。
- 本だけでなく、他の物も授業で取り入れるとより考えが深まると思う。

②後期　２月８日実施　　回答者：10名（ゼロ初級者５名・既習者５名が回答）

a. 日本語のクラスに関して（ゼロ初級者５名の回答）

＊数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
J1	5	0	0	0	0	0
S1	5	0	0	0	0	0
K1	5	0	0	0	0	0
文化	5	0	0	0	0	0

- 先生がとても親切だった。
- クラスの内容がおもしろかった。先生とよく話して日本語が上手になった。
- 授業はとても興味深かった。多くのの漢字は中国の漢字と違うことが分かった。
- 文化クラス無しでは、日本文化を知ることができなかった。とてもおもしろかった。

b. もっと勉強したいこと（複数回答可　ゼロ初級者５名の回答）

文法	会話	漢字	ﾘｽﾆﾝｸﾞ	発音	単語	読解	筆記	文化	ｽﾋﾟｰﾁ	その他
3	3	0	2	2	3	1	1	3	4	0

c. 授業以外の活動について（ゼロ初級者・既習者９名回答）

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
1）熊本・阿蘇旅行	6	2	1	0	0	0
2）大宰府見学	5	2	2	0	0	0
4）小学校訪問	8	0	1	0	0	0

- 実地で日本の文化を習うことができた。旅行のとき新しい友達もできた。
- 日本文化を知るのに役立った。アクティビティは楽しかった。
- １つ１つの場所でもっと時間が欲しかった。

d.「最終発表会」について（ゼロ初級者４名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
3	1	0	0	0	0

- 発表会の内容はとても有用だった。日本語で出身を紹介するのがおもしろかった。そして発音を練習することができた。
- スピーチの練習になった。書く練習にもなった。

e. コースに対する満足度（ゼロ初級者・既習者10名回答）

90%-100%	9
80% -89%	1
70% -79%	0
50% -69%	0
49% 以下	0

f. コース全体の感想（ゼロ初級者、既修者）

- 日本の文化を勉強できたのがよかった。実用的な会話が生活にとても役立った。
- 会話・漢字・文化クラスは為になるし楽しかった。げんきクラスは日本語能力のためにとても役立った。
- 日本語学習に集中するこが出来た。今後の研究に役立つと思う。
- 自分の研究が忙しかったけれど授業・宿題・テスト全て終わってよかった。先生もやさしくてよく教えて下さった。

5．今後の課題

今後の課題として、平成30年度（2018年度）は以下の２点をあげる。

1．平成30年度より Japanese Academic Courses（JACs）がラウンド制を廃止してクオーター制になったことから、当コースでも JACs と連動しつつ学期制に移行した。そのため開講コースの授業時間数が平成29年度とは変わり、総合コース（I)、漢字コース（K)、会話コース（S)、文化コースともにカリキュラムを組みなおすことになった。

今年度はカリキュラムを変更した初めの年であったことから各コースとも試行錯誤の状態であった。例えばＳコースでは平成29年度よりも学習範囲が狭くなったが、文化コースでは学習範囲が広くなった。今後、どのような内容を盛り込むかを検討しながら安定したコース運営が行えるよう調整していく必要がある。

2．平成30年度秋学期は、ゼロ初級クラスに国費留学生が在籍しておらず学内募集の学生のみのクラス編成となった。そのため学内募集生の予定に合わせる形でのコース運営となり、大学院入学試験日の前３日間は当コースを休講にすることになった。

今後も、秋学期は当コースを受講する国費留学生の数が増える見込みはないことから、学内募集生の希望を取り入れたコース運営がより求められるようになると考えられる。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，103－106
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U., 2020,
No.28, 103-106

基幹教育の日本語

Report on the Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese

郭　　俊　海*

１．はじめに

基幹教育では、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養こそが学問追求の基本であるという観点に立ち、自ら問いを立て主体的な学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することを目標として掲げている。基幹教育院のマネジメントのもと、全学出動態勢で教育が行われている。学部留学生が対象の「日本語」は、基幹教育院教員を班長とする日本語班において、留学生センターの日本語教育部門の教員と連携して、授業運営を行っている。

基幹教育の「日本語」は科目区分として言語文化科目群の言語文化基礎科目に分類されている。平成31年４月から、基幹教育の日本語は留学生センターが開講する日本語コース（JACs: Japanese for Academic Courses）と一本化され、言語文化基礎科目・日本語（Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese）として開講されている。

２．平成31年度の学習内容及び履修方法

今年度は、１年生は「基幹教育科目（日本語Ⅰ～Ⅳ）」、２年生以上は「基幹教育科目（日本語Ⅴ～Ⅵ）」となっている。「日本語」を細分類すると表１のようになる。

基幹教育科目では、基本的に第１・第２外国語の選択は、H25年以前と大きく異なり、大半の学部では「日本語」は第２外国語（文科系５単位、理科系４単位）に変わったのである。留学生については、概ね表２のようである。

３．単位履修のオリエンテーション

平成31年４月４日に、新入学部留学生（共創学部生も含む）を対象に、基幹教育の言語文化基礎科目・日本語科目の履修方法、科目登録及び日本事情に関するオリエンテーションを実施した。詳しくは次のとおりである。

日時：４月４日（木）13：20～14：05

*九州大学留学生センター教授

場所：１号館３階　1305教室
説明者：
　高松　悟（留学生センター・相談部門　准教授）
　郭　俊海（留学生センター・日本語教育部門　教授）

表１　日本語科目一覧及び開講学期

科目名	単位数	授業概要	開講学期				
			１年前期		１年後期		２年前期春夏
			春	夏	秋	冬	
日本語Ⅰ	1	日本語の総合基礎を学ぶ	○				
日本語Ⅱ	1	日本語の聴解・読解		○			
日本語Ⅲ	1	日本語の作文			○		
日本語Ⅳ	1	日本語の会話・発表				○	
日本語Ⅴ	1	長文などを読んで要約する技法を学ぶ					○
日本語Ⅵ	1	専門分野のレポート作成などの技法を学ぶ					○
日本語Ⅶ	1	学術的な口頭発表などの技法を学ぶ					○

表２　単位の取り方と卒業必要単位数[1]

卒業要件単位数	基本的な単位の取り方		
	１年前期	１年後期	２年前期
２単位必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから２単位分履修		
４単位必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから２単位分履修	
５単位必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから２単位分履修	日本語Ⅴから１単位分履修
６単位必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから２単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵから２単位分履修
７単位必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから２単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから２単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから３単位分履修

なお、学部・学科別の第１・第２外国語の指定及び修得単位数は以下のようになっている。

留学生の第１・第２外国語の選択では、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語・スペイン語の七つの言語と日本語の中から選択できる。なお、日本語を第１・第２外国語に選択した場合は所属学部・学科の卒業単位数を満たすように履修しなければならないとしているが、特例として、所属学部が認める場合は、英語を第１外国語に指定する学部・学科においても英語を第２外国語とし、英語以外の言語を第１外国語にすることができる。また、その場合は、第１外国語と第２

1 『2019年度入学者用 基幹教育履修要項』112頁より抜粋

外国語のそれぞれの修得単位数を定めず、両者を合わせて12単位を修得することができるとしている。

第１・第２外国語の履修の特例を認める学部は、共創学部（10月入学者のみ）、教育、法、理、医、歯、薬、工、農学部である。文、経済、芸術工については、特例のケースは認めていない。

表３　学部・学科別の第１・第２外国語の指定及び修得単位数[2]

学部		区分	履修言語	１年次	２年次以降	修　得単位数
共創学部	４月入学者	第１外国語	英語	10	2	12
		第２外国語	初修外国語	4	0	4
	10月入学者	第１外国語	日本語	8	4	12
		第２外国語	英語または初修外国語[3]	4	0	4
文学部 右の２パターンから選択		第１外国語	英語	4	3	7
		第２外国語	初修外国語	4	1	5
		第１外国語	初修外国語	5	2	7
		第２外国語	英語	4	1	5
文学部・国際コース		第１外国語	英語	10	2	12
		第２外国語	初修外国語	4	1	5
教育・法・経済学部		第１外国語	英語	4	3	7
		第２外国語	初修外国語	4	1	5
理・医・工・芸工・農学部		第１外国語	英語	4	4	8
		第２外国語	初修外国語	4	0	4
歯・薬学部		第１外国語	英語	4	6	10
		第２外国語	初修外国語	2	0	2

このような複雑な履修方法のため、学務部基幹教育課と留学生センターの日本語教育部門・留学生指導部門は共同で従来、新入生オリエンテーションで、留学生のみを集めて履修解説を行っている。

本年度の「日本語」の担当教員は、留学生センターの教員と非常勤講師（基幹教育院枠、１名）である。表４は時間割表である。

表４　時間割表

曜日	時限	前期		後期	
		春	夏	秋	冬
水	１限	日本語 VII（W）	日本語 VII（W）		
	４限				
	５限	日本語 I	日本語 II	日本語 III	日本語 IV

2 『2019年度入学者用 基幹教育履修要項』102頁より抜粋

3 第二外国語は第一外国語で履修する言語を除き、主となる母語以外の言語を履修する。

金	1限				
	4限	日本語 VII（K）	日本語 VII（K）		
	5限	日本語 V	日本語 VI		

※ K ＝漢字、W ＝作文

本年度の「日本語」受講者数は76名（Q[4] 1 ：24名、Q2：20名、Q3：16名、Q4：16名）である。1年生においては、前期に総合と聴解、後期に作文と会話・発表が、2年生以上においては、要約、レポート作成、口頭発表が履修できるように、カリキュラムを組んでいる。

4．基幹教育の「日本語」と留学生センターの日本語科目との統合

基幹教育の「日本語」と留学生センターの日本語科目（JACs）及び国際コースの低年次言語科目としての日本語科目が平成31年4月に全面的に統合された。これにより、従来、学部留学生だけが受講する基幹教育の日本語は、共創学部留学生、全学受け入れの短期留学生（JTW[5]、JLCC[6]）及び学部交換流留学生が受講することになり、様々な文化的背景を持つ留学生が同じクラスで学べる協働学習が実現できた。

5．おわりに

留学生の中には、様々な理由で日本語の聴く力、話す力、読む力、書く力のバランスがよくない学生が少なくない。特にレポートや論文などの文章作成や、日本語による口頭発表など応用面において問題がある学生が散見される。また、「日本語」を第2外国語とした場合、大半は2単位或いは4単位しか必要がなくなる。卒業に向けての専門科目の学習は、日本語の力、特に聴く力と書く力がないとかなり難しいため、統合後のカリキュラムでどのように学生の実践的な日本語力の向上を図るべきかが課題である。また、高度な日本語力を持っている学生に対して、日本語学習のモチベーションを保ちつづけるように、指導法の工夫も引き続き必要である。

4　Q: Quarter（クォーター、Q1：クォーター1）
5　JTW: Japan in Today's World Program
6　JLCC: Japanese Language Culture Course

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，107－111
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 107-111

補講コース・日本語（JTCs）

Japanese Training Courses (JTCs)

斉　藤　信　浩*

１．はじめに

九州大学には、JACs と JTCs という、２つの大きな日本語コースが走っている。JACs は学部に正規に入学した留学生（国際コースも含む）と大学間交換留学生の約160名前後を対象としたコースで、基幹教育科目の中で卒業単位として語学の単位認定を行う単位の出るコースである。一方、JTCs は大学院に所属し、語学の単位を卒業単位として必要としない大学院生（修士・博士・研究生・大学院交換留学生）のためのコースである。大学院所属の学生は各所属の院で研究活動を行う傍で、日本で生活上必要な日本語の習得が必要な場合には、補講科目として JTCs を受講する。いわば、九州大学が留学生へ提供しているセーフティネットのようなコースである。受講者数は300名を超え、コースとしては九州大学内で最大の日本語コースとなっている。

２．JTCs のコース構成

２．１．コースの期間について

令和元年度（2019年度）のコースの募集、及び、開講期間は以下、表１の通りである。オンラインの設定で「受講申し込み」と「オンラインテスト」を別々に設定することもできるが、多くの場合はこれらは同じ期間で一致している。

表１　令和元年度（2019年度）開講スケジュール

	前期	後期
受講申し込み	4月18日～4月22日	10月15日～10月21日
オンラインテスト	4月18日～4月22日	10月15日～10月21日
レベル結果通知	4月24日	10月23日
クラス選択	4月25日～4月26日	10月24日～10月25日
授業開始～授業終了	5月7日～7月12日	11月5日～1月31日

*九州大学留学生センター准教授

2．2．受講までの手続きについて

受講までの手続きは全てオンライン上で行われる。受講を希望する学生は、受講申し込み期間内に留学生センターのホームページの中にある「日本語教育」の中の「詳細 /see more」で情報をとり、「Online Placement Tests」をクリックすると、申し込みの画面が現れる。ここで申し込みとオンラインテストを行う。オンラインテスト終了後、「レベル結果通知」が学生へメール配信され、学生は自分のレベルを知り、クラス選択期間に、どのクラスが良いかを「クラス登録」の機能を用いて、自分で選択する。例えば、自分のレベルが日本語４であることを「レベル結果通知」で知った学生は、開講されている日本語４の３種類のクラス（日本語４a は火曜と木曜の２限、日本語４b は水曜と金曜の２限、日本語４c は水曜と金曜の３限）の中から、自分の都合の良いクラスを選択し、「クラス登録」で登録をするのである。クラス選択は早い者順である。オンラインテストは、日本語１の希望者は登録のみとし、日本語２以上の希望者には、文法・読解・聴解の３つのテストを課している。

2．3．コースの構成について

以下の、表２と表３は前期と後期のそれぞれのコース一覧である。

表2　令和元年度（2019年度）前期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (inter-mediate2)	日本語7（Japanese7）	中級を学ぼう 中級中期	1
中級 (inter-mediate1)	日本語6（Japanese6）	中級を学ぼう 中級前期	2
中級入門 (pre-intermediate)	日本語5（Japanese5）	中級へ行こう	2
初級後半 (elementary3)	日本語4（Japanese4）	GENKI Ⅱ	3
初級2 (elementary2)	日本語3（Japanese3）	GENKI Ⅱ	3
初級1 (elementary1)	日本語2（Japanese2）	GENKI Ⅰ	3
入門 (beginners)	日本語1（Japanese1）	GENKI Ⅰ	5

表3　令和元年度（2019年度）後期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (inter-mediate2)	日本語7（Japanese7）	中級を学ぼう 中級中期	1
中級 (inter-mediate1)	日本語6（Japanese6）	中級を学ぼう 中級前期	1
中級入門 (pre-intermediate)	日本語5（Japanese5）	中級へ行こう	1
初級後半 (elementary3)	日本語4（Japanese4）	GENKI Ⅱ	3
初級2 (elementary2)	日本語3（Japanese3）	GENKI Ⅱ	3
初級1 (elementary1)	日本語2（Japanese2）	GENKI Ⅰ	3
入門 (beginners)	日本語1（Japanese1）	GENKI Ⅰ	4

コースは、前期も後期も、日本語１から日本語７までの８レベルを用意したが、開講するクラス数を前期と後期で調整を行った。前期は日本語５と日本語６を２クラス、日本語１は５クラスの体制だったが、それらを１クラスずつ少なくした。その結果、後期には日本語１の受講希望者が100人もあ

り、４クラス各25名ということで振り分けなければならなくなり、日本語１のレベルを１クラス減らしたことは失敗だったと言える。日本語５は19名、日本語６は18名であったため、数としては妥当な数だったと言えるが、やはり、日本語５は初級を抜け出して、中級へ橋渡しをする難しいレベルであるため、２クラスを用意した方が良いと思われる。来年度には、日本語１と日本語５は１クラスを増設したいと考えている。

３．受講者数、及び、受講者の内訳

３．１．受講者数

表５に、令和元年度（2019年度）の前期と後期の、各レベル別の受講者数を示した。

表5　各期別の受講者数

前期		
申請者	プレース	受講者
177	162	162

後期		
申請者	プレース	受講者
313	291	245

前期は申請者177名、プレース者162名であり、後期は申請者313名、プレース者291名であった（プレース者とは、クラスにプレースされた学生数であり、受講者数は実際にクラス開始時点で受講した学生数を示している）。実際のニーズは申請者数が示しており、前期で177名、後期で313名であり、この数がこのコースのニーズを表している。令和元年度前期は開講クラス数が19クラスで各クラスの定員が20名であるので、総定員数は380名であったが、それに対してプレースされた人数が162名というのは充足率が50% にも満たず、前期の募集状況は芳しくなかったと言って良い。そのため、前節で言及したように、クラス数減を実施したところ、今度は逆に、非常に多くの希望者があり、20名を超えるクラスが続出してしまった。後期の各クラスの人数を表６に示す。

表6　令和元年度（2019年度）後期のクラス別の受講者数

日本語７	12						
日本語６	15						
日本語５	23						
日本語４a	14	日本語４b	15	日本語４c	8		
日本語３a	13	日本語３b	10	日本語３c	8		
日本語２a	17	日本語２b	9	日本語２c	13		
日本語１a	25	日本語１b	24	日本語１c	24	日本語１d	22

3．2．コース申請者の内訳（所属・身分別）

表７と表８はコース申請者の所属部局と身分（修士・博士・研究生・交換留学生）別に集計したものである。

表7　令和元年度（2019年度）前期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	交換留学	部局別計
生物資源環境科学府	13	14	4	1	32
経済学部・経済学府	13		3		16
教育学部					
統合新領域学府	1		1		2
地球統合科学府	3	3	1	1	8
人間環境学府	4	1	5	2	12
システム情報科学府	3	3	8	3	17
法学部・法学府	12			6	18
文学部・人文科学府	2	1	1	3	7
数理学府			6		6
理学部・理学府	2	1	4		7
工学部・工学府	12	14	14	5	45
芸術工学部・芸術工学府					
システム生命科学府		5	3		8
農学部			4		4
薬学部・薬学府			2		2
医学部・医学府	1		1		1
課程別計	66	41	47	21	

国籍（上位5ヶ国）：中国75、インドネシア12、韓国12、ミャンマー８、ベトナム7
性別：女性90、男性85

表8　令和元年度（2019年度）後期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	交換留学	部局別計
生物資源環境科学府	13	21	1	2	37
経済学部・経済学府	14	3	7	8	32
教育学部				1	1
統合新領域学府	2	2			4
地球統合科学府	3	2	5	1	11
人間環境学府	7	2	29	6	44
システム情報科学府	2	4	19	1	26
法学部・法学府	21			6	27
文学部・人文科学府	5	1	4	5	15
数理学府	1		6		7

理学部・理学府	7	1	4		12
工学部・工学府	13	32	28	2	75
芸術工学部・芸術工学府		1			1
システム生命科学府		5	1	2	8
農学部			13		13
課程別計	88	74	117	34	

国籍（上位5ヶ国）：中国162、ベトナム16、インドネシア16、韓国14、台湾12
性別：女性153、男性162

4．まとめと今後の課題

4．1．クラス数の設置

これまでの経験則として、後期には受講者数が多く、前期には受講者数が少なくなるということはわかっていたが、どのレベルが多くなるかということまではわからない。そのため、具体的に開講クラス数をどのように調整するかということになると、正確な予測は難しい。また、JTCsの問題点として、単位の要らない学生を対象とした補講の授業であるため、本業の大学院の実験や論文が忙しくなると出席しなくなるという現象がある。特に、後期は、開始時には人数が多いが、１月、２月に院試を控えた研究生、修士論文提出を控えたM2の修士過程の学生が激減していくという現象があり、極端な例では15名程度で開始したクラスが、２、３名に減少してしまうことも、珍しいケースではあるが発生し、場合によっては１月に学生がゼロになることも過去に一度あった。これもクラスの設置数をどれくらいにするべきか悩む材料である。

4．2．広報体制

毎期、受講開始の２週間前に全部局へJTCsの募集案内を出し、各部局の事務から所属留学生への広報を行なってもらっている。令和元年度後期には、募集用のポスターを作成し、学生の集まる図書館と食堂に掲示を依頼した。今後も募集用のポスターを作成し、関連施設への掲示を依頼するなどし、継続的に広報体制を充実させていきたい。

参考文献

斉藤信浩・酒井彩（2018）「補講コース日本語（JTCs）」『九州大学留学生センター紀要』第26号、pp.97-102.
酒井彩（2019）「補講コース日本語（JTCs）」『九州大学留学生センター紀要』第27号、pp.115-124.

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，113－115
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 113-115

病院地区・日本語コース

Japanese Language Courses at Hospital campus

斉　藤　信　浩*

１．はじめに

病院地区（医学部・薬学部・歯学部）は、留学生センターが設置されている伊都キャンパスから離れているため、病院地区に所属する留学生のために、別途で、日本語コースが2017年度の後期から開講されている。主な受講生は、大学院所属の留学生（修士・博士・研究生）と医系３学部の部局間交換留学の交換留学生、そして、2018年度の秋学期からは、博多駅サテライトキャンパスで運営されている九州大学ビジネススクールの交換留学生（QBS）も参加するようになった。開講までの経緯については、斉藤（2018）に詳述してある。今回は、それ以降の５学期分の報告と、第５期に行ったコースの改編を中心に報告をする。

２．コースの再構成

２．１．クラスとレベル数

第１期から第３期までの開講レベルは初級２クラス（Japanese 1、Japanese 2）であり、それまでは受講者数が少ないながらも、レベル設定として、Japanese 1と Japanese 2で収まっていた。しかし、第４期になり、Japanese 1のレベルの受講生がゼロという事態が発生した。更に、Japanese 2から継続学習をしたいという要望も上がるようになった。従来のレベル設定は、Japanese 1が『Genki 1』の L.1から L.6、Japanese 2が『Genki 1』の L.7から L.12となっており、連続的に配置されていた（斉藤2017）。連続的に配置することは初級項目を詳細に学習し、定着させられるという利点もある一方で、対象となるレベル範囲が狭くなってしまうため受講できない学生も発生しやすくなってしまっていた。そのため、第４期には変則的に、レベル設定を Japanese 2と Japanese 3へと上方修正して、２クラスを開講するという緊急措置を取った。

この第４期の経験と、過去、受講者数が少なかったという問題点を解決するために、表１のようなかたちに、コースの改編を行った。予算として、10週間で規定された総コマ数は、90分×40コマという限定があるため、Japanese 1に該当する入門のレベルは20コマで手厚く残しつつ、その上のレベルは10コマで２レベルを構成し、Japanese 1から Japanese 2へ機械的に連続するコース構成ではなく、設定さ

*九州大学留学生センター准教授

れるレベル幅を広く取り、中級の入口あたりのレベルの学生までを受容できるように改編を行った。

表１　病院地区の補講日本語コースの構成と受講者数の推移

（旧）2017 ～ 2019前期	Japanese 1	Japanese 2	
2017年後期	4（4）	7（6）	
2018年前期	4（1）	5（3）	
2018年後期	10（8）	12（5）	
（旧）2019年前期		Japanese 2	Japanese 3
2019年前期		5（1）	10（5）
（新）2019年後期～	Beginner	Speaking 1	Speaking 2
2019年後期	15	10	7

注：（　）内は最終的にＤ以上で合格した学生の数

２．２．新編成の内容

新しく編成されたコースの内容は以下、表２に示した通りである。特定の教科書は用いず、教師の用意したプリントやスライドで学習を進める。

表２　再編されたコースの内容

	開講数／週	開講週数	開講コマ数	レベル
Beginner	2回	10週	20コマ	ゼロからの学習者を対象に、初級文型を提示しつつ、口頭練習をしていく。授業内では文字学習は行わない。
Speaking 1	1回	10週	10コマ	Biginnerを終えた段階の学生が口頭練習を中心に、生活上必要な表現や語彙を学習する。
Speaking 2	1回	10週	10コマ	Speaking 1よりも上の、一定レベルの日本語力がある学生のために、口頭練習を中心に表現や語彙を補強していく。

Japanese 1に該当するレベルとしてBeginnerを設けた。Beginnerは、口頭練習を中心にゼロ初級から学習していく。20コマでも、文字学習を入れると時間的にきつくなるため、平仮名・片仮名の学習は授業内では行わず、宿題とその添削でフォローし、クラス内はフローな文型練習の時間を多く確保できるようにした。Speaking 1は基本的にはBeginnerを終了したレベルであるが、Beginnerを終了したレベルといえども、単文レベルの発話が可能なレベルであるため、初級文型の学習はほとんど終わっていない。そのため、日常的なシチュエーションを設けつつ、会話（口頭練習）を行いながら、初級文型を拡げていくのが目的である。１つ上のSpeaking 2はある一定の口頭産出が可能なレベルの学生を対象に、会話練習を中心に日本語力の補強をしていく。Speaking 2の方が受講者のレベル範囲が広くて、教師は大変かもしれない。予算的に、これ以上のレベルを増設することができないため、Beginner、Speaking 1、Speaking 2の３レベルで病院地区の留学生の日本語教育を進めていく体制を取り、少しでも多くの留学生に日本語学習の機会を確保するようにした。

2．3．開講期間と受講者募集について

コース設置からの全ての開講期間を以下に記す。第１期の募集は全てオンライン（簡易プレテ）上で処理したが、Japanese 1の学生はオンラインプレースメントテストの受験自体が不要なため、第２期と第３期はJapanese 1の受講希望者には、メールで教務補佐へ直接申請するようにして名簿を作成した。その後、第４期以降は、オンラインによるプレースメント自体を廃止し、Google formを利用して、全て自己申告でレベルを決定している。基本的には、ゼロ初級からの学生ならBeginnerに、それ以上はSpeakingなので、若干のレベル幅は許容し、不要に上のレベルを目指したことによる学生自身の不利益は自己申告をした学生自身の責任と考える。但し、開講後、登録変更によるレベル移動を認めているので、教師がレベル差が大きいと判断した場合は、レベル移動を促すことがある。

第１期：2017年11月２日～ 2018年１月26日（オンラインテスト10月13 ～ 10月16日）
第２期：2018年５月８日～ 2018年７月13日（オンラインテスト４月19 ～４月23日）
第３期：2018年11月１日～ 2019年１月29日（オンラインテスト10月17 ～ 10月22日）
第４期：2019年４月18日～ 2019年４月22日
第５期：2019年10月１日～ 2019年10月28日

2．4．受講者と受講者数について

受講者数は、表１に示したように、Beginnerが15名、Speaking 1が10名、Speaking 2が７名で、過去最高の合計32名の受講者があり、新編成にした成果が現れたかたちとなった。受講者は後期は九州大学ビジネススクール（QBS）の交換留学生が参加するため、人数の底上げの効果もあるが、前期はQBSの受講者が見込めない。今回、福岡市東区に住んでいる留学生からの受講希望も若干見られ、少しずつコースが認知されつつあるように思われる。病院地区で日本語コースを受講する留学生は、九州大学に在籍している留学生であれば医系３学部に限定していないため、病院地区での日本語コースの開講レベルで良いのであれば、居住地の都合で受講しても構わない。前期はQBSの学生の受講が望めないため、希望者があれば今後も病院地区で医系３学部以外の留学生も受け入れていきたい。

3．今後の改善点

ようやく第５期になって受講者が30名を超えることができた。恒常的に30名を超える体制が確保できれば、クラスの運営がよりスムーズになると思われる。まずは第５期に、改編を行った体制を定着させられるように運営をしていきたい。各レベルの教科の内容も今期が初めての試みであるため、この内容を充実させるところから病院地区の日本語コースを充実させていきたい。

参考文献

斉藤信浩（2018）「病院地区・日本語コース」『九州大学留学生センター紀要』26, 103-104.
斉藤信浩（2019）「病院地区・日本語コース」『九州大学留学生センター紀要』27, 75-78.

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，117－124
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 117-124

筑紫・大橋地区日本語コース

― 2014年度～ 2019年度 ―

Japanese Language Courses at Chikushi and Ohashi campus From 2014 to 2019

小　山　　悟*

１．引き継ぎ当時の状況

九州大学には伊都、馬出、筑紫、大橋の４つのキャンパスがあり、2019年11月１日現在2,521名の留学生が所属している。このうち筑紫キャンパスに所属する留学生は199名、大橋キャンパスに所属する留学生は233名で、両地区合わせておよそ100 ～ 140名が毎学期日本語の授業（課外補講[1]）を受講している（表１・２、図１・２参照）。

筆者がそれまで担当していたG30学士課程国際コースの担当を外れ、両地区の担当になったのは2014年度の前期であった。当時、筑紫・大橋地区では週２回×10週間の日本語授業（初級１・初級２・中級）が「両地区合同」という形で行われていた。それはつまり、週２回の授業のうち１回を自分の所属地区で、もう１回を別の地区に通って受けなければならなかったということである。しかも、筑紫地区と大橋地区はJRまたは西鉄１本で移動できるとは言え、移動には40 ～ 50分かかった。それゆえ、３時間目の「初級２」の授業を（自分の所属ではない）もう一方の地区で受けるためには、昼休みを使って移動し授業を受けた後、４時間目の授業中に元いた地区に戻らなければならなかったのである。２時間目の「初級１」も同様であり、４時間目の「中級」に至っては３時間目と５時間目に専門の講義やゼミが入っていないことが受講の実質的な条件となっていた。そのため、受講者は非常に少なかったようで[2]、当時の教授陣からは「筑紫・大橋地区には中級クラスの需要がない」との理由で中級クラス廃止の提案がなされたほどであった。

表１　筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）

年度	13春	14春		15春		16春		17春		18春		19春	
地区	合同	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大
初級１	―	12	8	**25**	5	**19**	7	**26**	14	**26**	13	**23**	12
初級２	―	6		11	8	14	12	25	8	16	7	11	7
中級	―	14		10		11	21	14	22	17	6	10	9
上級				8		12	19	15	16	18	19	10	14
合計	―	32	8	54	13	56	59	80	60	77	45	54	42

*九州大学留学生センター准教授

表２　筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

年度	13秋	14秋		15秋		16秋		17秋		18秋		19秋	
地区	合同	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大
初級１	10	22	15	**28**	8	**50**	14	**27**	14	**34**	15	**30**	12
初級２	7	10		6	6	12	5	21	11	22	10	15	4
中級	2	14		5	14	12	25	14	29	24	22	18	25
上級				8	20	5	19	8	21	19	39	18	22
合計	19	46	15	47	48	79	63	70	75	99	86	81	63

注．表１・２ともに太字は大学院クラス[3]の受講者も含む

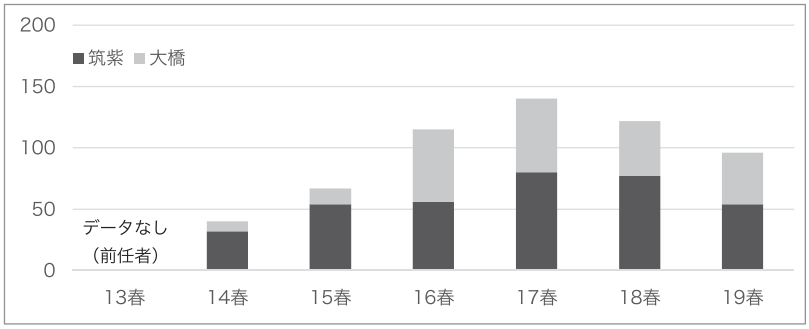


図１　筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）

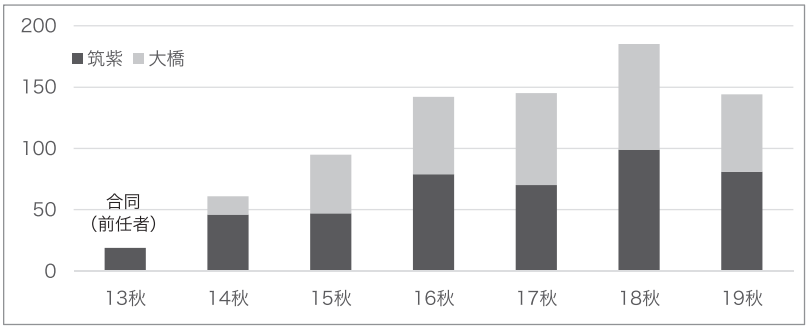


図２　筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

2　最初に取り組んだこと

両地区の担当になって筆者が最初に取り組んだことは、中級クラスを存続させることと、両地区合同のコース運営をやめることの２点であった。前者については、九州大学は他の国立大学と同様、漢字圏出身の学生が多いことから[4]、「中級に対するニーズがない」とはとても思えなかった。受講者が少ないとすれば、それは「両地区合同」というコース運営のあり方に原因があるのであって、その原因を作っているのは外でもない、我々日本語教育部門であった。学生たちが受講したくても受講でき

ない仕組みを作っておきながら「ニーズがない」では、単なる責任転嫁でしかない。事実、筑紫地区が「教育の質向上支援プログラム（EEP）」の交付を受けて、留学生センターが提供する日本語の授業とは別に、独自に開講していた日本語クラスには、表３にも示したように、前期は30名弱、後期も40～50名ほどの学生が来ていた。

表3　筑紫地区が独自に開講していたEEP日本語コースの受講者数

	初　級	中　級	上　級	合　計
2012年度後期	22名	21名	10名	53名
2013年度前期	13名	9名	5名	27名
2013年度後期	19名	9名	13名	41名

幸い、筑紫地区の留学生担当教員から中級クラス廃止の撤回を求める意見が出され、これに日本語教育部門が「学府長から正式な要望書が提出されれば再検討する」と応じたことから、筑紫地区においては引き続き存続されることになった。一方で、大橋地区からは特に意見が出なかったため、一旦廃止されることとなった。

後者の「各地区ごとの運営」については予算の確保が課題であった。合同クラスをやめるということは、それまで両地区に配分されていた３クラス（初級１・初級２・中級）６コマ分の予算を倍にするということである。小規模とはいえすぐには実現困難で、部門内部からの反対も予想された。加えて、担当交代を知らされたのが１月後半で、新学期開講まで時間もなかった。そこで、事務局に「１クラス２コマ分だけでもどうにかならないか」と直談判し、2014年度はとりあえず４クラス８コマ分の予算で両地区の日本語コースを運営することとなった。

図３は2014年度（前期・後期）の日本語コースの構成である。筑紫地区に３クラス分の予算を使い、筆者自身が授業を担当する大橋の初級１と初級２のクラスは合同で行うことにした。２つの地区を同時に改善・整備するのではなく、まずは一方の地区を改善・整備し、それに準じてもう一方の地区の改善・整備を要求するという戦略であった。

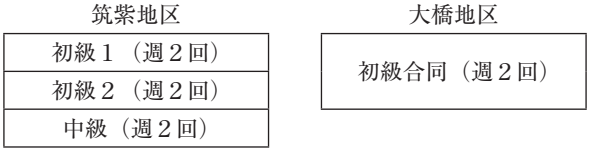


図３　2014年度（前期・後期）の日本語コース

3　次に取り組んだこと

2015年度に向けて次に取り組んだことは、筑紫地区「上級」クラスの新設と大橋地区「初級２」クラスの復活である（図４）。前者については、先にも述べたように、筑紫地区が独自に開講していた

EEP 日本語コースの上級クラスに毎学期10名前後の学生が来ていたことを実績として挙げた。また、当時移転途中だった新キャンパス（伊都地区）において週３回の日本語クラスが４レベル開講されていたことも「学習機会の均等化」という観点から要求の根拠とした。一方、後者については、大橋地区には欧米からの短期留学生（半年または１年）が毎年10名近くおり、その学生たちのためにも最低２学期は日本語を勉強できるようにするべきだと訴えた。

筑紫地区	大橋地区
初級１（週２回）	初級１（週２回）
初級２（週２回）	**初級２（週２回）**
中級（週２回）	
上級（週２回）	

図４　2015年度（前期）の日本語コース

上記の要望が無事実現できたことを受けて、同年後期には大橋地区の日本語コースを筑紫地区並みにすることを要望として上げた（図５）。この要望が通った背景には、大橋地区の当時の係長が学生たちの利益を第一に考え、学生たちの生の声を聞くなどして、要望の根拠となる詳細な資料を揃えてくれたことが非常に大きかった。感謝の念に堪えない。

筑紫地区	大橋地区
初級１（週２回）	初級１（週２回）
初級２（週２回）	初級２（週２回）
中級（週２回）	**中級（週２回）**
上級（週２回）	**上級（週２回）**

図５　2015年度（後期）の日本語コース

こうして現在の「週２回×10週×４レベル」という体制が筑紫・大橋両地区において出来上がったわけであるが、これで満足しているわけではない。同じ課外補講である伊都地区のJTCと比較しても、まだまだ格差は大きい（本紀要に掲載されたJTCの報告を参照）。留学生センターは全学共同利用施設であり、日本語教育部門として第一に考えるべきことは、本学に所属する留学生に均等に日本語学習の機会を提供するということであろう。この点（学習機会の均等化）については「同じ大学の同じ身分の学生であるにも関わらず、所属地区の違いによって受けられる支援の内容に差があるのは問題ではないか」とこれまで何度か訴えてきたが、現在も未解決のままである。新たな予算を確保する必要は必ずしもなく、決して難しいことではない。例えば、各地区に所属する留学生数の比率に準じて、今ある予算の配分方法を見直すだけでも良いのである。ただ、そのためには、現在のような縦割りではなく、本学の留学生教育を全学的な視点で捉える必要があり、それが部門としての共通認識になるまでにはもうしばらく時間が必要なようである。

一方で、「少人数の細かくレベル分けされたコース」という理想ばかり追い求めるのではなく、与えられた条件の中で何ができるのかを考えることも専門家としての役割であろう。受講者が何百人もい

て予算も潤沢にあるというのであれば、それもよいのだが、そのような恵まれた環境で教えられる教員は全国的にも決して多くはないであろう。筑紫・大橋両地区の日本語授業も同じである。そこでまず、筆者自身が授業を担当している大橋地区の初級１・２のクラスに関して、学生たちのニーズに応え、学生たちに一定程度満足してもらえるような授業のあり方を改めて検討することにした。これについては本紀要に掲載された別稿で、過去数年間「計画→実行→評価→改善」のサイクルを繰り返しながら作成した教材について報告しているので、そちらを参照されたい。

4　現在行っている授業について

最後に現在行っている筑紫・大橋地区の日本語授業について報告しておきたい。先にも述べたように、漢字圏出身の留学生が多いという点は両地区とも同じであるが、日本語コースの受講者についてはそれぞれ特徴があり、他の先生方の協力を得ながら、学生たちのニーズに合わせたコース運営を行っている。

4．1．筑紫地区について（表６・７）

筑紫地区については非漢字圏出身者、中でも中東・東南アジア・南アジア出身の受講者が多いことが特徴である。日本語の学習スタイルという点で言えば、比較的ゆっくりコツコツ勉強したい学生が多いようである。

初級クラスでは、筆者が本地区の担当になる前から EEP 日本語コースで使っていた『げんき』（The Japan Times）をそのまま教科書として使っているが、「週２回×10週間×２学期」では Vol.1を終えるだけで精一杯である。そのため、一時期中級クラスでも引き続き『げんき』を使用し、前期に Vol.2の前半を、後期に Vol.2の後半を勉強していた。実質的な「中級クラスの初級クラス化」である。しかし、後期に入学した学生は翌年度の前期に Vol.1の学習を終えた後、翌学期に Vol.2の前半を飛ばしていきなり後半を勉強しなければならなかったため、現在は特定の教科書は使わず、Vol.2で学習する文型・文法を盛り込んだ教材を担当の教員が独自に作成し、授業を行っている。漢字圏の学生が多い上級クラスも同様で、学生のニーズ・希望に合わせた教材を毎学期担当の教員が自作している。これにより両クラスとも、学生が２学期（またはそれ以上）続けて受講することが可能となった。

表６　筑紫地区の時間割（2019年度春学期）

	月	火	水	木	金
１時限					
２時限					
３時限					
４時限					
５時限	上級	初級２ 中級 大学院【修士】	初級１	初級２ 中級 上級	初級１

注　大学院（国際コース：修士・博士）　週１回×15週

表７　筑紫地区の時間割（2019年度秋学期）

	月	火	水	木	金
１時限					
２時限					
３時限					
４時限					
５時限		初級２ 中級 大学院【博士】	初級１	初級２ 中級 上級	初級１
６時限	上級				

注　大学院（国際コース：修士・博士）　週１回×15週

４．２．大橋地区について（表８・９）

一方、大橋地区には先にも述べたように、毎学期欧米からの短期留学生10名ほど来ており、そのほとんどがゼロ初級者である。そのまた一方で、漢字圏出身の学生を中心に中級または上級の学生が多いこともこの地区の特徴である。研究生の受け入れに際し、学府が「日本人学生と一緒に日本語でゼミや講義を受けられること」を条件としていることから[5]、学生の多くが自身の日本語力を証明するために、日本語能力試験（主にN1とN2）中心の勉強をしてきているからである。そのため、2018年度までは「欧米系のゼロ初級者」と「漢字圏の中上級者」という２つの学習者群が存在し、そのどちらにも属さない学生が初級２のクラスにわずかながらいるという状態が続いていた。しかし、最近になって韓国からも短期留学生を受け入れるようになったことから、第三の学習者群が構成されつつある。

コース運営についても筑紫地区との大きな違いがある。それは、同じレベルのクラスでも曜日ごとに授業内容を変えている点である。これは2016年度後期から導入したもので、例えば、中級クラスでは「文法」と「会話」、上級クラスでは「文法」と「作文」（2019年度後期からは「発表・作文」）に分けている。初級１・２クラスも同様である。これには３つ理由があった。

１つは、より多くの学生に日本語学習の機会を与えたいと思ったことである。それまでは、例えば初級１クラスの場合、火曜日に勉強した内容の続きを木曜日に勉強するという授業運営をしていた。そのため、週２回の授業の両方に出席できなければ受講を断っていたが、曜日によって学習内容を分け、実質的に週１回の授業を２種類開講することで、どちらか一方だけでも受講できるようにしたのである。もちろんどちらか一方だけでは、合計10回しか受けられず、それで果たしてどれほど上達するのかとも思うのだが、「せっかく日本へ来たのだから、日本語を少しでも勉強したい」「入試に向けて今のうちに少しでも多く勉強しておきたい」というのが学生たちの正直な気持ちであろう。また、筑紫・大橋両地区で行っている日本語の授業が留学生支援の一環としての課外補講であることも、より柔軟性のあるシステムにしようと考えた理由の１つであった。

２つ目は、学生の日本語力のバランスの悪さである。これは特に中・上級レベルの学生に多く見られる問題である。先にも述べたように、本学での学位取得を目指して入学してくる研究生の場合、入学基準を満たすために、日本語能力試験対策を中心とした勉強をしていることが多い。ところが、この試験の公式サイトを見てみると、N2の合格点は180点中90点で、各試験（言語知識・聴解・読解）の基準点は60点中19点に設定されていることがわかる[6]。漢字圏出身の学生にとっては、聴解試験の足切りにさえ引っかからなければ、どうにかなる点数なのである。事実、入学してきた学生に直に会ってみると、読み書きはできても聞き話しがほとんどできないということが少なくない[7]。そのような学生がいた場合、例えば、入試に備えて上級の作文クラスを受講する一方で、中級の会話クラスで聞き話しの練習をするというような、各自のニーズに合わせた受講の仕方ができるようにするべきであろうと考えた。

そして３つ目に、2016年当時、伊都地区や箱崎地区では総合コースの他に会話や漢字の技能別コースも開講されていたため、大橋地区の学生が不公平感を感じないようにしたいという思いもあった。

表８　大橋地区の時間割（2019年度前期）

	月	火	水	木	金
１時限					
２時限		初級１ 【会話】		初級２ 【会話】	
３時限		初級２ 【文法】		初級１ 【文法】	
４時限					
５時限		上級【文法】	中級【文法】 上級【作文】		中級【会話】

表９　大橋地区の時間割（2019年度後期）

	月	火	水	木	金
１時限					
２時限		初級１ 【会話】		初級２ 【会話】	
３時限		初級２ 【文法】		初級１ 【文法】	
４時限					
５時限		上級 【文法】	中級 【文法】		中級 【会話】 上級 【発表・作文】

5 今後の課題

このように、筑紫・大橋両地区では学生たちのニーズに応えようと、毎年工夫を重ねつつ日本語コースの運営をしてきた。ここまで６年間大過なくやってこられたのは、言うまでもなく各クラスの授業を担当している先生方のおかげである。特に、中級や上級のクラスでは、わずか10週間20回の授業で学生たちに進歩や上達を実感させるのは容易ではなく、同じクラスを２学期、３学期続けて受講する学生たちのために、毎学期独自に教材を作成しなければならなかった。先生方の負担はかなりのものであったろう。そのような厳しい環境・条件の中でも毎回創意工夫してくれている先生方に敬意を表するとともに、この場を借りて改めて御礼申し上げたい。

注

1 筑紫・大橋両地区に在籍する留学生（主として大学院生・研究生）および研究員を対象に行われている単位の出ない授業のこと。

2 「ようだ」という推量表現を使ったのは、前任者が全く記録を残していないためである。引き継ぎの際に手渡された2013年度後期の受講者数が唯一の記録であり、そこからの推定と各地区の事務局担当者からの伝聞情報が元になっている。

3 筑紫地区の総合理工科学府が国際コースの留学生のために（単位の出る）正規授業として開講している授業のこと。修士の学生を対象とした「Communication Skills in Japanese」（前期開講）と博士の学生を対象とした「Fundamentals of Japanese Communication」（後期開講）の２つがある。国際コースの学生も最初は留学生センターの課外補講を受けていたが、その後上記２つのコースが開講した際、筆者が学内非常勤として担当することになったため、筑紫地区の日本語コースの受講者数に加えて、毎回教員会議に報告している。

4 2019年11月1日現在、筑紫地区の漢字圏出身者（中国・台湾）は113名で56.8％、大橋地区は171名で73.4％である。

5 芸術工学府の研究生入学案内では受験に際し、日本語能力を証明する書類の提出を求めており、注意事項に以下のことが記されている。
「本学府では、外国人留学生のために特別の指導を行ったり、特別のクラスを設けるようなことはありません。研究指導、討論、必要に応じて参加する講義など、大学で行われる研究のための教育指導の言語は、ほとんど日本語で実施されます。教育環境は日本人の学生と同じです。従って日本語能力は必須の条件となります。日本において研究・生活するためには、事前に自国において日本語教育を受けるか、日本語学校等で日本語の学習をした上で研究生入学の準備をすることが必要です。」（原文のまま）
http://www.design.kyushu-u.ac.jp/kyushu-u/temp/bed3cbb4dd376d1e845bf769cb971026.pdf（2020年１月13日アクセス）

6 https://www.jlpt.jp（2020年１月13日アクセス）

7 それとは反対に、聞き話しは上手だが読み書きは苦手という非漢字圏の学生も稀にいる。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，125－126
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 125-126

2019年度日韓共同理工系学部留学生事業に関わる日本語予備教育について

Preliminary Japanese Language Education for those in the 2019 Japan-Korea Joint Exchange Program in Science and Engineering

岡　崎　智　己*

日韓両国政府の合意によって開始された本事業も第２次第10期となる今回でいよいよ最後を迎える。今年も昨年と同数の７名（今年は男子５名・女子２名）の学生が本学への進学を希望して来日し、学部入学前の予備教育の一環として、以下の日程で日本語コース（Japanese Academic Courses：以下JACsと表記）の受講を開始した。

９月17日～９月26日	JACsオンライン登録、及びOPT受験[1]
９月26日	JACsヘルプデスクを開設
９月30日	JACsオリエンテーションを実施
10月３日	漢字テスト・会話テストを実施
10月４日	JACs受講コースの決定・発表
10月８日	JACs授業開始

今年もレベル判定のための各種プレースメント・テスト（インターネットを利用したウェブサイトでの文法・読解・聴解のテスト、及びオンサイトでの漢字筆記テストと会話力判定インタビューテスト）の結果に応じ、各自のJACs受講コースを決定した。その際、学部進学後に受講する基幹教育・言語文化科目「日本語」を考慮し、I-6以上の日本語力を有すると判定された学生には予備教育期間中はＩコースではなくＷコースを受講してもらうようにした。これは昨年に倣っての措置である。[2]

10月８日にJACsが始まり、10月４日に発表したコース・レベルで日本語の授業を受けてもらったところ、何人かの学生でレベル調整（クラスの移動）が必要であることが判明した。そこで、JACsコーディネーター、及び学生本人と授業担当者教師間で話し合った結果、最終的に各自の受講コースは以下のよう（10月22日現在）になった。

---

*九州大学留学生センター教授・日韓プログラム日本語教育コーディネーター

1　Online Placement Testsの略。インターネットを利用し、特設したウェブサイトで「文法」「読解」「聴解」のレベル判定テストを実施した。

2　日韓プログラム生の場合、学部１年生で履修する基幹教育・言語文化科目「日本語」はJACsのＩコース（I-6以上）を受講することになっている。

	受講が決定したJACsコース		
学生１	K-7	S-7	W-6
学生２	K-8	S-8	W-8
学生３	K-6	S-6	I-5a
学生４	K-5	S-4	I-4b
学生５	K-7	S-7	W-6
学生６	K-6	S-6	W-6
学生７	K-3b	S-3	I-2b

なお、今期受け入れた７名の学生中、１名（学生４）はどうにか初級終了程度、もう１名（学生７）に至っては初級の前半も終了できていない日本語レベルと判定された。初級終了程度の日本語力の学生の受け入れは過去にも例がなかったわけではないが、初級も終了できていない学生の受け入れは今回が初めてである。本学への入学を許可・決定したのは学生の受け入れ部局（学生７については理学部）であるが、果たして学部入学前の予備教育（JACsの受講期間は16週間）だけで入学後に必要となる日本語力を身につけることができるか危惧される。留学生センターとしては最大限のサポートを行うが、それにも増して本人の努力に負うところが極めて大であろう。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，127－131
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 127-131

農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育

― 2019年度の実施概況 ―

2019 Overview of the Japanese Language Education for those in the Undergraduate International Program in English (IUPE) at the Faculties of Engineering and Agriculture

岡　崎　智　己*

1．はじめに

農学部と工学部の学士課程国際コース（以下、IUPE[1]と表記）に入学した留学生（以下、IUPE 生と表記）に対し、英語による基幹教育を行う中で、IUPE 生のみを対象として外国語としての日本語の授業を１年半（＝入学時～２年生前期まで）行う体制（３レベル・３クラス構成）から、留学生センターが提供する Japanese Academic Courses（技能別８レベル構成、以下では JACs と表記）の中から I コース（総合日本語コース）と K コース（漢字学習コース）を受講し、それを基幹教育・言語文化科目「日本語」に読み替えて卒業に必要な科目の履修と単位の修得に当てる体制に移行して今年で２年目となった。以下では、2019年度の新入１年生の受け入れと２年生に進級した IUPE 生の JACs 受講に関する概況を報告する。

2．JACs 受講までのスケジュール

農学部 IUPE は11名、工学部 IUPE は21名と今年度は昨年度に比べ大幅に新入生が増えた。新入生に向けては来日前の９月17日までに基幹教育教務係を通じて JACs 受講に関する案内を送り、以下に示すスケジュールに従って JACs 受講に至る準備を進めた。なお、基幹教育教務係を通じて連絡を行うのは、オンラインによる JACs への登録、及び Online Placement Tests（以下、OPT[2]と表記）の受験に本学が発行する学生番号が必要なためである。

*九州大学留学生センター教授・IUPE 生の JACs 受講に関する窓口担当教員

1　International Undergraduate Program in English の略。

2　来日前にも受験できるようインターネット上の特設サイトで「文法」「読解」「聴解」の３種類の日本語レベル判定テストが行えるようにしてある。

９月17日～９月26日	JACs オンライン登録、及び OPT 受験期間
９月26日	JACs ヘルプデスクの開設[3]
９月27日	JACs オリエンテーションを開催
同日	漢字（筆記）テストの実施
９月28日	JACs 受講コースの決定・発表[4]

２年生に進級する IUPE 生（農学部３名、工学部13名）については春学期（＝クォーター１・クォーター２）に受講した JACs の成績評定に基づいて秋学期（＝クォーター３・クォーター４）に受講する JACs のコース（レベル）を決定し、それを８月中に基幹教育教務係を通じて周知した。[5]

３．受講コース（レベル）調整の結果

秋学期（＝クォーター３）の JACs は10月８日に開始されたが、新入生は OPT、及び漢字テストの結果を踏まえて判定されたコース（レベル）に、また２年生は前学期に受講した JACs の成績評定に基づいて決定されたコース（レベル）の授業に出席し、そこで改めて各自の日本語力に関するチェックを授業担当教師から受け、もし必要であればレベルの再調整、あるいはコース間の移動を行った。そして JACs 開始後ほぼ１週間以内を目安に最終的な各自の受講コースを決定した。

ところで、IUPE 生向けの『Kyushu University KIKAN Education 履修要項』（以下、『IUPE 履修要項』と表記）では、１年生は I コースと K コースを、２年生（前期）は I コースを受講するよう定めているが、学士課程国際コース実施調整会議・教育部会（以下、IUPE 教育部会と表記）での取り決めに基づき、日本語母語話者相当と判定された農学部の新入生（A1-11）については JACs の受講を不要とし、また学生の母語とこれまでの日本語学習の進行状況に鑑み、I コースに替えて K コースの受講が妥当と判断された４名の２年生（A2-3、E2-8、E2-12と E2-13）については K コースの受講が許可された。[6]

以下に11月10日現在での全学生の受講コースを示す。

農学部 IUPE １年生（11名）11月10日現在

学生 A1- 1	I3a	K3a
学生 A1- 2	I5a	K6

3 オンラインでの登録や OPT の受験がうまくできなかった学生が対象。

4 OPT と漢字テストの得点結果に基づくクラス・レベル分けの判定結果を基幹教育教務係に伝え、それを基幹教育教務係が学生ポータルサイトに掲示。

5 IUPE 生が JACs を受講するに当たり、JACs を基幹教育科目として履修登録する業務やその成績評定結果の記録・管理は全て基幹教育課・基幹教育教務係の所管となっている。

6 学生の日本語能力や日本語学習状況の実情に応じ、必ずしも『IUPE 履修要項』に記載の規則に縛られることなく「運用面で個々に対処」することが令和元年第１回 IUPE 教育部会（5月27日開催）、及び令和元年第２回 IUPE 教育部会（９月26日開催）で協議され、基幹教育院、農学部、工学部と留学生センターの関係者の間で合意されている。

学生 A1- 3	I1a	K1+2a
学生 A1- 4	I5a	K6
学生 A1- 5	I2a	K3a
学生 A1- 6	I1a	K1+2a
学生 A1- 7	I1a	K3a
学生 A1- 8	I2a	K3a
学生 A1- 9	I1a	K3a
学生 A1-10	I3a	K3a
学生 A1-11	JACs 受講免除	

工学部 IUPE 1 年生（21名）11月10日現在

学生 E1- 1	I3a	K3a
学生 E1- 2	I2a	K1+2a
学生 E1- 3	I3a	K4
学生 E1- 4	I1a	K1+2a
学生 E1- 5	I2a	K1+2a
学生 E1- 6	I2a	K3a
学生 E1- 7	I1a	K1+2a
学生 E1- 8	I2a	K3a
学生 E1- 9	I1a	K3a
学生 E1-10	I1a	K1+2a
学生 E1-11	I5a	K5
学生 E1-12	I1a	K1+2a
学生 E1-13	I3a	K4
学生 E1-14	I1a	K1+2a
学生 E1-15	I2a	K1+2a
学生 E1-16	I1a	K1+2a
学生 E1-17	I2a	K3a
学生 E1-18	I3a	K1+2a
学生 E1-19	I3a	K1+2a
学生 E1-20	I3a	K4
学生 E1-21	I1a	K1+2a

農学部 IUPE 2 年生（3 名）11月10日現在

学生 A2- 1	I5a
学生 A2- 2	I3a
学生 A2- 3	K5

工学部 IUPE ２年生（13名）11月10日現在

学生 E2- 1	I3a
学生 E2- 2	I3a
学生 E2- 3	I3a
学生 E2- 4	I4a
学生 E2- 5	I8
学生 E2- 6	I3a
学生 E2- 7	I3a
学生 E2- 8	K7
学生 E2- 9	I3a
学生 E2-10	I4a
学生 E2-11	I3a
学生 E2-12	K5
学生 E2-13	K7

４．IUPE 生の JACs 受講に関わる今後の課題

昨年に引き続き、今年も入学者に日本語を母語とする学生が含まれていた。そうした学生については JACs の受講を免じ、それに代わって初修外国語科目、もしくは少人数セミナーやディシプリン科目等を受講させる取り決めになっているわけだが、こうした取り扱いについて『IUPE 履修要項』には明記されていない。あくまでも IUPE 教育部会での話し合いにおける合意に基づいて「運用面で個々に対処」しているにすぎない。今年、２年生に進級した学生４名（農学部１名・工学部３名）が、『IUPE 履修要項』の規定に従えば I コースを履修しなければならないにもかかわらず、それに代わって K コースを履修できるように措置したのも同様の事例であり、いずれも学生の不利益にならないようにとの配慮からであった。[7] しかし、こうした事態を少し別の角度から見れば、本来遵守すべき履修規則が守られていないことになり、であればそもそも『IUPE 履修要項』記載の規則とは一体何なのかということなる。さらに言えば、自分の都合を強く主張する学生には随時例外が適用され、一方、規則をそのまま受け入れて何も言い出さない学生はたとえ自分の日本語学習に適さない、あるいは益さない履修の仕方でもそのままになってしまうという事態が起こりえる。「一部の人だけが得をしているんじゃないか」とか「なんだかズルをしている人がいるみたいだ」といった誤った風評が立たな

7　これまでの例では『IUPE 履修要項』に定められた以外の仕方で JACs を受講したいと学生から申し出があった場合、JACs 統括コーディネーター（留学生センター日本語教育部門専任教員）が中心となって JACs 担当教員（非常勤講師を含む）の間で状況を確認・判断し、IUPE 生の JACs 受講に関わる留学生センター窓口担当教員を介して当該学生が籍を置く学部（= 農学部もしくは工学部）の IUPE 生世話役教員、及び基幹教育を主管する基幹教育院（= 代表として IUPE 教育部会・議長）と基幹教育課（= 担当係である基幹教育教務係）に連絡・報告、『IUPE 履修要項』記載の規則から外れ「運用面で個々に対応」してよい事例かどうかの確認を取った上で当該学生の JACs 受講コースを変更するという措置を取っている。

いとも限らず、そうなれば教育指導上甚だ好ましくないばかりか、教育機関としての信用、信頼の失墜にも繋がりかねない。

以上のような憂慮から、この状況の一刻も早い打開、改善のため、現行の『IUPE 履修要項』を改定し、学生一人一人の状況に応じて柔軟な仕方で「日本語（=JACs）」の履修ができる旨を明確に記した新たな『IUPE 履修要項』の作成を早急に行うべきであるとの提案・要請を IUPE 教育部会・議長宛に行った。[8] 加えて、「日本語（=JACs）」の修得単位数に関する規定で、英文（正）とその日本語訳（副）の表記が一致していないところも修正をし、『IUPE 履修要項』における「日本語」科目履修規定の表記を IUPE 以外の一般学部入学者向けに編纂された『基幹教育　履修要項』のそれと揃えることも併せて要請した。[9]

8　本件については昨年中から IUPE 教育部会の場で幾度となく表明し、また基幹教育課に対しても説明＋要望を行っており、本年11月に再度改めて IUPE 教育部会・議長に宛てに『IUPE 履修要項』改定の要望を伝えた。

9　『IUPE 履修要項』の英文（正）では「Students also have to acquire 6 credits from “Integrated Courses” and 4 credits from “Kanji Courses”」となっているが、その日本語訳（副）は「日本語では『Integrated Courses (1)』から６科目６単位以上および『Kanji Courses (1)』から４科目４単位以上を修得しなければなりません（下線は筆者）」となっていて文意が一致していない。なお、IUPE 以外の一般学部入学者向けに編纂された『基幹教育　履修要項』では留学生の「日本語の履修」について「卒業までに12単位を修得します」のように記載されており、「12単位以上履修します」のような書き方はされていない。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，133－136
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 133-136

Summer in Japan（SIJ）2019 および Summer Program for EJEP2019 実施報告

木　下　博　子*

斉　藤　信　浩**

１．はじめに

留学生センターの短期受け入れプログラムである Summer in Japan（以下 SIJ）と、Summer Program for EJEP は、2018年度より共同で開講している。SIJ は過去16年間に渡り実施してきたサマーコース Asia in Today's World の後継プログラムとして、2019年に３年目を迎えた。また、Summer Program for EJEP は、日本・エジプト両政府間で締結されたエジプト日本教育パートナーシップ（Egypt Japan Education Partnership、以下 EJEP）の一環で設立された円借款留学事業の一つとして設けられた短期留学プログラムであり、エジプト人留学生の受け入れ実績が多い本学、かつ短期受け入れプログラムの運営経験の豊富な留学生センターに特別に設置された。本報告書では、今年度のプログラムを参加学生に実施したアンケート評価を交えて概観する。

２．SIJ および Summer Program for EJEP 概要

２．１．概要

期間	2019年６月24日（月）～ 2019年７月19日（金）
キャンパス	伊都キャンパス
滞在形態	前半：ドミトリー　後半：福岡市・糸島市でのホームステイ
開講科目	現代日本研究入門（Introduction to Contemporary Japan、以下 ICJ）コース 日本語（Japanese Language Course、以下 JLC）コース

2019年のプログラムは６月24日（月）から７月19日（金）までの４週間、伊都キャンパスで開講した。前半２週間は伊都ドミトリーに滞在し、後半２週間は福岡市、糸島市の一般家庭でのホームステイを実施した。今年度は初めて Summer Course for EJEP の学生もホームステイに参加した。開講科目は、現代日本研究入門（Introduction to Contemporary Japan、以下 ICJ）コース（２単位）と日本語（Japanese Language Course、以下 JLC）コース（１単位）とし、両コースとも所定の修了条件を満た

*九州大学国際交流推進室准教授
**九州大学留学生センター准教授

した場合のみプログラム修了とみなした。

2．2．参加学生の動向

SIJ は、募集開始後に本学の協定校（大学間、および部局間を含む）および北京オフィス、台湾オフィス、ハノイオフィス、カイロオフィスを通じてポスターを電子媒体で送付し、広報活動を実施した。募集期間は、2019年１月中旬～２月末日とし、期間中26件の応募があった。選抜課程では、所属大学における成績証明書（GPA スコア）、英語能力を証明するスコア（TOEFL iBT あるいはそれに準ずる英語能力検定試験のスコア）、および小論文を総合的に判断し、21名を合格とし最終的に14名が参加した。

Summer Program for EJEP 参加者の選考方法については、エジプト政府側の審査（書類審査、面接試験）を通過した者が推薦されたため、推薦された６名全員を受け入れることとした[1]。本プログラムは例年アジアからの応募者が多い傾向にあるが、今年度もシンガポール国立大学をはじめベトナム国家大学、北京航空大学校、アテネオデマニラ大学、マラヤ大学から応募があった。その他ミシガン大学、シェフィールド大学などアメリカ、イギリスからの応募者もあった。学生の専攻分野も人文・社会科学系が中心であったが、コンピューターサイエンス、機械工学といった工学系分野の学生もいた。

3．現代日本研究入門（ICJ）コース

ICJ では留学生センター、国際交流推進室および他の部局教員によるオムニバス形式のリレー講義と、スタディートリップを実施した。また、最終課題としてグループプレゼンテーションを課した。以下の図表は今年度の ICJ 講義一覧である。

図表１　ICJ 講義一覧

Lecturer	Class Titles
Prof. IKUTA	Value and Spirituality in Japan 1 with JTW students Value and Spirituality in Japan 2 Value and Spirituality in Japan 3（Study Trip with JTW students） Value and Spirituality in Japan 4 with JTW students
Prof. IMAI	Economic History of Japan 1 Economic History of Japan 2
Prof. NONAKA	Overview of the Japanese education system（Introduction） Comparative and international education（Reflection & Analysis） The future of education in Japan and beyond（Application）
Prof. KINOSHITA	Multicultural Dimension in Japan 1 Multicultural Dimension in Japan 2 Multicultural Dimension in Japan 3
Guest Lecturer	Introduction to Community Development 1 Introduction to Community Development 2（Study Trip） Introduction to Community Development 3

1　別途、SIJ と同様に成績証明書（GPA スコア）、英語能力を証明するスコア、小論文を提出してもらった。

Study Trip	Hakozaki Shrine with Prof. Ikuta and her JTW students *1 Itoshima city-hall and surrounded area with guest lecturer *2 Japanese tea ceremony Hakata walking tour

出典：筆者作成

今年度は新たな試みとして、留学生センターで別途実施されている短期受け入れプログラムである Japan in Today's World（以下 JTW）に参加する学生と合同での講義、スタディートリップを実施した。図中の *1および *2は、ICJ の講義の一環として実施したスタディートリップを示しており、それぞれ箱崎神社でのお汐井取りと、糸島市役所地域振興課訪問および糸島市で地域振興事業に従事している移住者へのインタビュー、駅周辺でのフィールドワークを行った。その他、茶道体験と福岡コンベンションビューローの協力を得て、博多エリアのウォーキングツアーを実施した。

アンケート結果では、それぞれのコースに対する高評価が目立ったが、自身の専門とは異なるため難しかった、興味をもてなかったなどの回答もあった。

4．日本語（JLC）コース

今年度の日本語コースは、Beginner、Elementary 1、Elementary 2、Intermediate の 4 レベルで開講した。日本語力によって、4つのレベルに分けるために、オンラインによるプレースメントテストを行い、文法力と聴解力を測定した（ただし、Beginner はゼロからの日本語学習のため、オンラインプレースメントテストを課さず、自己申告によって Beginner に入った）。文法テスト（60点満点）を中心にレベルを測定した結果、Elementary 1 は10点～19点、Elementary 2 は23点～39点、Intermediate は50点～52点という範囲に収まり、各レベル間の差がはっきりと出た。その結果、各レベルの構成人数は、Beginner が 7 名（SIJ：2 名 /EJEP：5 名）、Elementary 1 は 5 名（SIJ：5 名）、Elementary 2 は 4 名（SIJ：4 名）、Intermediate は 4 名（SIJ：3 名 /EJEP：1 名）という結果になった。クラスの使用教科書、および、学習範囲と内容を以下に示した。

図表２　日本語コースの概要

レベル	教科書と範囲	内容
Beginner 入門	Genki 1 L.1 ～ L.4	平仮名・片仮名から学習を開始し、数字や曜日など、基礎語彙を学習しつつ単文レベルの日本語の訓練を行う
Elementary1 初級1	Genki 1 L.9 ～ L.12	フォームを中心に学習し、単文から複文へ表現を広げていく。依頼・許可・経験・推量などの表現も学習する
Elementary2 初級2	Genki 2 L.13 ～ L.16	やりもらいから自他動詞、アスペクト表現など、受身や使役などヴォイス表現も学習していく
Intermediate 中級	中級を学ぼう L.1 ～ L.4	初級項目を終えた学生が会話を中心に中上級の文型や語彙を学習していく

出典：筆者作成

今年度は全員が100%の出席率で、成績もほとんどの学生がAの評価を得ることができた。日本語科目の担当教員からも学生達が非常に意欲的で、クラス運営がしやすかったという感想を得ている。

5．九大生との交流

今年度のプログラムでも、昨年度と同様に本学学生との交流の場を積極的に設けることを目的として、参加学生に対して九大生のチューターを１名配置し、キャンパスライフを支援するチューター制度、および本学の部活・同好会との課外活動を実施した。今年度の課外活動は、チューターを交えたウェルカムレセプション、書道部との交流会、和太鼓同好会との演奏・合奏体験の３つである。特に和太鼓同好会との交流は、学生からのアンケート評価が最も高く、それぞれのグループが最後に会員の学生と一緒に合奏を行い一体感の高まりが感じられた。

6．おわりに

本報告では、SIJ と Summer Course for EJEP の実施についてアンケート結果と合わせて概観した。本プログラムのように、協定校に限らない学生受け入れを実施しており、なおかつ４週間という極めて短いプログラムでは、参加学生の日本や日本社会に関する基礎的知識にばらつきがあり、言い換えるなら、学生同士共通の知識がほとんどないところからのスタートでありコース設計が極めて困難である。また、教員と学生、あるいは学生同士の人間関係の構築にも十分な時間とはいえない状況でのプログラム運営のため、プログラム開始前にEmailを通じた積極的コミュニケーションが鍵であった。他方で、４週間という短期であるからこそ学生の積極性は高く、幅広い興味関心をもつ学生に助けられることも多くあった。来年度も実り多いプログラムとなるよう祈念する。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，137－142
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 137-142

日本語・日本文化研修コース
第19期生報告

Report on Japanese Language and Culture Course
(JLCC 2018-2019)

郭　　俊　海*

１．はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース（JLCC: Japanese Language and Culture Course、以下「JLCC」と略す）は、日本国以外の大学の学部もしくは大学院で日本語・日本文化に関する分野を専攻している学生を11か月間受け入れ、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることにより、諸外国の将来を担う世代に日本への興味・関心を伝播し、日本の事情に通じた指導者となる人材を育成することを目的とした短期留学コースである。

２．概要

２．１．受け入れ人数

平成12年度から、日本語・日本文化研修コース生は一括して留学生センターが受け入れ主体となっており、平成30年度の受け入れ人数は19人である。

２．２．受け入れ期間　その年の10月１日から翌年の８月31日まで

２．３．出身国・地域と出身大学

19期生は、10カ国・地域の13大学から計19名が参加している。うち、奨学金受給者は、国費が３名（大使館推薦２名、大学推薦１名）、住友商事奨学金が２名、JASSO が14名である。表１はその出身国（地域）と出身大学を示す。

２．４．コースの修了要件

JLCC のカリキュラムは、必修科目、選択必修科目そして選択科目から構成される。コースを修了するには、年間30単位（450時間）の履修が必要である（表２）。

*九州大学留学生センター教授

◆必修科目（２単位、30時間）

留学生センターで春学期に開講される「自主研究（ISP：Independent Study Project）」で、２単位を履修する。

◆選択必修科目（24単位、360時間）

留学生センターで開講される選択必修科目群の「日本語論（JL: Japanese Language and Linguistics）」、「日本社会文化論（JC: Japanese Culture and Society）」のうち、それぞれ年間12単位以上を履修する。詳しくは表２のとおりである。

◆選択科目（４単位、60時間）

基幹教育院や各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目を年間２科目（４単位）以上履修する。

表１　19期生の出身国（地域）と出身大学

国・地域	大学名	人数
オーストラリア	クイーンズランド大学	1
オランダ	ライデン大学	1
韓国	済州大学校	1
タイ	チュラロンコン大学	1
台湾	台湾大学	1
中国	華中科技大学	2
	南開大学	2
	華南理工大学	2
	同済大学	2
ドイツ	ミュンヘン大学	2
フランス	国立東洋言語文化大学（INALCO）	2
ベトナム	ハノイ貿易大学	1
ホンコン	香港中文大学	1
計（10カ国・地域）	（13大学）	（19名）

２．５．単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることもできる。

表２　JLCC19期生のカリキュラム

	秋学期（10月-３月）	曜日・担当者	春学期（４月-８月）	曜日・担当者
選択必修科目	日本語論（Japanese Language and Linguistics）　通年12単位（180時間）			
	JL 101　日本語の語彙と語法 JL 102　日本の文学 JL 103　日本語・日本文化概論 A JL 105　日本語総合力を使おう	金３岡崎 水３斉藤 金２郭 火２疋田	JL 201　日本語のスタイルと表現 JL 202　日本語のバリエーション JL 203　日本語・日本文化概論 B JL 205　日本語教育学	金３岡崎 火５斉藤 金２郭 水２小山
	日本社会文化論（Japanese Culture and Society）　通年12単位（180時間）			
	JC 102　日本人と和菓子 A JC 103　現代日本の姿 JC 104　ドラマで学ぶ日本の歴史 JC 105　４コマ漫画にみる日本 A JC 106　日本映像文化論 A	木３脇坂 木２西頭 水２小山 火３和田 木５川邊	JC 202　日本人と和菓子 B JC 203　人と社会を考える JC 204　現代の小説を読む JC 205　４コマ漫画にみる日本 B JC 206　日本映像文化論 B	木３脇坂 木２西頭 火２疋田 火３和田 木５川邊
必修科目			自主研究（ISP）　2単位（30時間）	水３金３郭
選択科目	基幹教育院や各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目 通年４単位（60時間）以上			

２．６．第19期生の主な年間行事

日にち	行事内容
2018年	
９月19日（水）	JLCC 生来日
22日（土）	オリエンテーション
24日（月）～ 25日（火）	九重オリエンテーション、旅行中に三者面談
18日（火）～ 26日（水）	JACs オンライン受講申し込み＆プレースメントテスト
28日（金）	三者面談
10月１日（月）	平成29年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開講式
８日（月）	福岡市早良区防災センター見学
11月４日（日）	東風公民館交流会
12月２日（日）～３（月）	JTW・JLCC 長崎見学旅行
2019年	
１月７日（月）	基幹教育及び学部の授業開始
21日（月）	長崎被爆者講話
	春学期オリエンテーション
21日（月）～ 22日（火）	三者面談
３月28日（木）～４月２日（火）	JACs オンライン受講申し込み＆プレースメントテスト
４月５日（金）	大分（日田市）日帰り見学旅行
５月20日（月）	吉野ヶ里遺跡見学

27日（月）	ゲストレクチャー
6月3日（月）	歌舞伎鑑賞
24日（月）	玄洋小学校交流会
7月8日（月）	太宰府戒壇院座禅体験
8月7日（水）	閉講式・パーティー
8日（木）～8月26日（月）	自主研修期間
27日（火）	JLCC 成果発表会

3．授業科目の履修

3．1．授業の取り方

授業の取りかたについては、従来通り、秋学期に留学生センターが開講する各種の技能別日本語コース（総合、会話、漢字、作文）と JLCC の必修科目を中心に受講させ、日本語力を高めることを目的とした。春学期には、引き続き JLCC の必修科目、基幹教育院や学部の授業を中心に受講させた。

3．2．必修科目「自主研究」

研修生の日本語の応用力を高めることと、身を持って日本人や日本社会に接する機会を与えることを目的とし、従来の「文献講読」を15期生から「自主研究（ISP: Independent Study Project）」としている。

「自主研究」は「文献講読」と「社会調査」に分けた。社会調査では、各自が興味のある（日本に関する）分野からテーマを見つけ、それについて問題設定や社会調査（インタビュー調査・質問紙調査）を行う。２週間に一回口頭発表による進捗情況の報告をし、学期末にレポートを作成する。文献講読は従来のやり方を踏襲した。各自が興味のある本（日本に関する内容）を一冊選び読み通し、２週間に一回読書レポートを書く。提出したレポートをもとに口頭報告を行い、そして学期末に最終レポートを提出する。

研修生たちはインタビュー調査・質問紙調査といったフィールド・スタディを通じて、日本人や日本社会に接する機会や日本人とのインターアクションが増え、興味のある分野の学習を深めることができただけではなく、日本留学の達成感も味わうことができた。

以下は、研修生たちのレポートのテーマである。

【文献講読】

1. キム・ギョンス　「死刑その哲学―死刑制度の存廃―」
2. クリストフ・フェルカー　「明治維新の柔軟性の柔軟性」
3. クンラチャー・パッタラパーニー　「日本語の古典」
4. ゲン・キ　「少年法改正をめぐる議論－少年法の適用年齢の引き下げを中心に―」

5. コウ・ユウゼン 「雇用者報酬から見る日本経済の長期停滞」
6. シュー・セッセイ 「いじめ問題の検討」
7. ソン・ゼン 「せっかち文化とのんびり文化の徹底比較」
8. チン・シイ 「日中文化の違い―心理文化の深層構造の視点から―」
9. プン・ジョナタン 「日本語を教えるための第二言語習得論入門」
10. ヨアヒム・バン・デル・ポール 「日本の雇用情勢」

【社会調査】

1. オウ・ジンカ 「日本語学習者の日本語の性差に関する意識―女性語をめぐり―」
2. サブリーナ・エルムリッチ 「なぜ日本の社会は原発から離脱できないのか」
3. シュウ・テイキ 「日本の自動車メーカーの海外進出戦略―東アジアを中心に―」
4. タントニエ・レミ 「ベトナム人移民に対する日本人の意識と思考」
5. チン・カイキョ・ウィンキー 「アニメ聖地巡礼―ファンが巡礼から得るもの―」
6. チン・ブンケイ 「日本の大学における国際化」
7. ライ・ティ・ジュエン 「ベトナム人から見た日本の接客サービス」
8. リー・インイン 「日本人大学生の余暇の過ごし方とそれに対する意識」
9. リュウ・シンイ 「中国語母語話者の日本語動詞学習ストラテジー改善法・シーン作り―動詞学習実態研究―」

3．3．エクストラ・カリキュラムの開発

近年、JLCC 生の関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつある傾向である。修了生からは「日本文化を体験できる機会を増やしてほしい」「見学旅行や日本人との交流活動をもっと多く行ってほしい」、「帰国前に日本でインターンシップを経験したい」等の声が上がってきている。こういった修了生のフィードバックを踏まえ、体で日本文化を体験できる活動を増やすことを目的とし、ゲストレクチャーや課外活動を含むエクストラ・カリキュラムの開発・実施を行っている。

19期生のゲストレクチャーは、九州大学留学生センター今井亮一准教授に行っていただいた。テーマは「日本の伝統芸能―歌舞伎―」（日時：2019年５月27日）である（ここに厚くお礼を申し上げます）。

また、本学の学務部キャリア・奨学支援課の協力のもと、2018年より JLCC 生に対してインターンシップ実習の支援を継続している。希望者が日本人学生と同様に、本学の、学務部キャリア・奨学支援課経由でインターンシップ参加の申込を可能にしている。

3．4．その他

学生の指導においては、秋学期の授業の開始前（10月１週目）と秋学期の終了前（１月３週目）に、

２回にわたってJLCC生全員を対象に一人ずつ三者面談（コーディネーターと事務担当）を行った。面談を通じて、学生の来日後及び留学中の適応状況や生活上・勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズな問題解決につながった。

また、研修生が効果的に日本語や日本文化に関する研修を自ら行えるように、平成27年度から、閉講式終了後の翌日から成果発表会の前日までの期間を自主研修期間として設けた。研修前に自主研修計画書、研修後に報告書を提出させることにしている。

4．コース評価

春学期の「自主研究」の最後の授業時に、研修生によるプログラム評価の報告会を行い、カリキュラムの構成、授業内容、見学旅行及び今後の改善点などの面から、「非常に満足」「満足」「どちらとも言えない」「あまり満足しない」「満足しない」の５段階評価で評価してもらった。

1. カリキュラム（回答者：15人）
   カリキュラムの構成、授業内容について、「非常に満足」「満足」と回答した人が14人（93％）だった。カリキュラムの構成や授業内容に満足していることが示されている。
2. 見学旅行（回答者：17人）
   「旅行の場所（内容）」に対しては、「非常に満足」「満足」が12人（71％）に止まっている。旅行の回数に対して「非常に満足」「満足」と回答した人が15人（88％）を上回ったが、今後、学生のニーズを踏まえた見学旅行先の選定が必要である。
3. 「自主研究」（回答者：17人）
   自主研究の難易度については、「ちょうどよい」が11人（65％）、「難しい」「とても難しい」が４人（24％）だった。日本語能力のバラツキによるものではないかと思われる。全体的に「良かった点」としては、「自分で研究できたのは意義があった」「調査の方法・レポートの書き方などたくさん身についた」、「一人ひとりのペースに合わせて個人指導してくださったので、とても役に立った」といった意見があった。一方、問題点として「時間はときどき足りなかった」、「論文を書くことについての指導がもっと多ければ良かった」との指摘があった。個々人のレベルやニーズに合わせ、さらなる指導の工夫が求められている。

5．今後の課題

近年、研修生から「日本人学生と一緒に受ける授業が少ない」といった声が上がってきている。今後、日本人学生と共同学習できるカリキュラムの開発が課題である。

また、プログラムの期間中及び終了後に、日本企業への就職、日本や海外の大学院への進学に関する相談が増えてきている。今後、こういった日本語・日本文化研究生を対象とした、就職、大学院進学に関するアドバイスやフォローアップをいかに提供すべきかが、引き続き課題となる。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，143－152
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 143-152

Exploring the experiences of JTW tutors: Challenges and opportunities

Chisato Nonaka *

Masa Higo *

Ryoichi Imai *

Introduction

Each year, the Japan in Today's World program (JTW hereafter) enrolls a large number of international students from all over the world. It is one of the most diverse international programs at Kyushu University, in terms of the program participants' academic interests, age as well as their cultural and linguistic backgrounds. As expected with any type of study abroad experience, many of the JTW students likely face challenges such as culture shock, adjustment issues, and occasional home sickness. While the JTW team[1] endeavors to provide maximum support for the students to survive and thrive in the new academic and cultural environment, the program also has other understated yet extremely important individuals who influence the outcome of the JTW students' study abroad experience. They are known as the JTW tutors, who are expected to both personally and academically extend a helping hand to their tutees (= JTW students). In this essay, we will look into the JTW program from the rare perspectives of select JTW tutors and discuss the status quo, known issues, and suggestions for improvement.

Two Types of Student Helpers at Kyushu University

Before introducing the six JTW tutors who graciously agreed to share their insights for this essay, we would like to give a brief background of the current tutor/supporter system at Kyushu University. There are mainly two types of student helpers for international students in place.

*Associate Professor, Professor, and Associate Professor of Kyushu University International Student Center

1 Consists of three faculty coordinators (Professor Masa HIGO, Associate Professors Ryoichi IMAI and Chisato NONAKA) and key staff members at the JTW office.

Type	Whom they assist	Arrangement	Main responsibilities	Duration	Compensation
Tutors	International students on short-term exchange programs	One-on-one	• Welcome at the airport/ dormitory; • Help with administrative paperwork; • Introducing campus and surrounding area; etc.	Varies from one program to another	1,000 yen/hour
Supporters	Degree-seeking international students	Group-based	• Welcome at the airport/ dormitory; • Help with administrative paperwork; • Introducing campus and surrounding area; • Advise on course registration; etc.	First three months of their arrival	1,000 yen/hour

Tutors

The first category of student helpers are called "tutors." The tutors assist international students who come on exchange for a period of a month to a year, depending on the program. There are five such short-term inbound exchange programs[2] through which Kyushu University hosts students from our overseas partner institutions[3]. The JTW program is one of these such programs. In these programs, each international student is assigned with their own tutor.

The tutors' roles range from one program to another, however, some of the common responsibilities include: *welcoming their tutee at the airport or at the dormitory; helping with administrative paperwork; introducing the campus and surrounding area; and giving instructions on using the public transportation*. Since it is a one-on-one arrangement, many tutors build a long-lasting friendship with their tutees which often extends beyond the duration of the official tutor-tutee agreement.

Supporters

The other category of student helpers are called "supporters" who work in teams to help degree-seeking international students to settle into their new college life at Kyushu University. A team of supporters is assigned to a specific department with which the incoming students are affiliated. Since it is a group-based arrangement and the official appointment period lasts up to three months, the relationship between the supporters and the supported students likely differs in nature from the above tutor-tutee relationship.

The obligations of supporters include: *welcoming the students at the airport or at the dormitory; helping*

2 Namely, JTW (Japan in Today's World); JLCC (Japanese Language and Culture Course); *Nikkan* (Preliminary Course for Japan-Korea Joint Exchange Program in Science and Engineering); Intensive Japanese Course; and SIJ (Summer in Japan) are the five short-term inbound exchange programs.

3 The comprehensive list of our international partner institutions can be found at: http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/agreeview/institution.php?en=1

with administrative paperwork; advising on course registration; introducing to different clubs and on-campus activities; and helping to liaise with students from the same country.

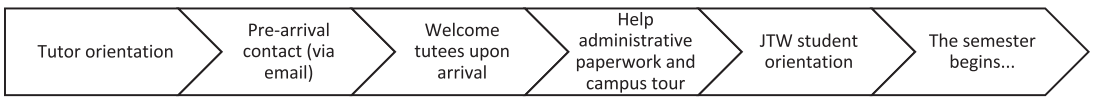
Benefits of Being Student Helpers

Both tutors and supporters receive compensation of 1,000 yen per hour of "work," however, the paid work is capped at 48 hours for tutors and 24 hours for supporters per term. Although it is unknown how many of the tutors and supporters are motivated solely by the remuneration aspect, if and when tutors or supporters assist their assigned student(s) beyond the maximum compensation hours, it becomes purely voluntary and out of their willingness to help instead of the mere obligations of the role. Since being a tutor or supporter for an international student offers rare opportunities to broaden their global outlook, such student helpers are encouraged to engage in active and continuous communication with their assigned students.

JTW Tutors

As described above, tutors and supporters play a major role in warranting the quality and outcome of international students' study abroad experience at Kyushu University. For our program (JTW), a tutor of the same sex is assigned to each JTW student before the program officially begins. All the tutors attend a mandatory two-hour orientation in which they get to meet other tutors and their duties and responsibilities as well as specific tasks are fully explained. For example, prior to the tutee's arrival, the tutor is expected to email the tutee, introducing themselves and helping to comfort the tutee about their upcoming adventure in a foreign country.

Upon their arrival in Fukuoka, the tutees are met by their tutors at the dormitory to help settle into the new environment. In the next few days, the tutor helps their tutee with administrative paperwork at the international office on campus as well as at the local government office in Fukuoka. The tutor also shows the tutee around the campus and the surrounding area so that the tutee becomes familiar and comfortable with their new environment in a timely manner. An orientation for JTW students is usually held within several days of their arrival and that is also when the tutors are invited and asked to introduce themselves to the entire group of new JTW students. It is actually one of the few opportunities during the program that all JTW students and most of their tutors gather in one place. Once the semester begins, communication between the tutor and tutee is largely left to the discretion of the pair, hence, there seems to be a varied degree of interaction and relationship dynamics.



Although the JTW team has consciously maintained a certain distance from the activity of tutors-tutees to give them free rein, we have always been curious and sought different contributions we could possibly make to improve the overall quality of the tutor-tutee experience. This essay is one such attempt to address the status quo, challenges, and suggestions for improvement for the current tutor-tutee system as well as the JTW program at large.

Interviews with Six JTW Tutors

In order for us to gain insight into the tutor-tutee experiences and locate known issues as well as possible areas for improvement, we have decided to interview the following JTW tutors.

Interviewees

For this essay, six students who are currently serving as JTW tutors were contacted. Their years of study range from undergraduate to graduate and their majors also vary.

Interviewees (pseudonyms)	Gender	Year of study[4] & Major[5]	How many terms they've served as a JTW tutor
1. Haruto	Male	M1 Science	3+
2. Yua	Female	U4 Science	3+
3. Shogo	Male	U3 Science	1
4. Jun	Male	U2 Arts & Sciences	2
5. Akari	Female	U4 Liberal Arts	2
6. Mio	Female	U4 Liberal Arts	3+

These students were chosen to be interviewed because of their steady presence and involvement in the program and have occasionally joined in some of the JTW-related events (e.g., study trips and JTW core courses) since the beginning of this year's JTW program in Fall 2019.

Data Collection and Procedure

Data for this essay was collected using semi-structured in-depth interviews. Each student was interviewed individually and in person by one of the faculty coordinators. The interview ranged from 15

4 M = Master's level, U = Undergraduate level, and the numerical number indicates their year.

5 In order to maintain the anonymity of the students interviewed for this essay, their majors are broadly categorized into three different groups: Science; Liberal Arts; and Arts & Sciences. These categories are for the purpose of this essay and the university does not officially categorize academic disciplines as such.

to 30 minutes in duration. For each interview, a simple method of note taking (i.e., notebook) was used and no audio- or video-recording was made to help ensure a casual conversation-like environment. The interviewees were informed of three main interview questions beforehand, so they could come to the interview with some expectation in mind. After the intention of the interview and the confidentiality and privacy rights were explained, the interviewees were asked to consent to the interview process.

The interview began with some basic background questions such as their major, year of study, and their overseas experience. Subsequently, the three main interview questions (detailed in the findings section) were posed respectively and follow-up questions were asked as necessary. All data that will be presented below are translated (Japanese → English) and reconstructed from the notes taken during the interview as well as based on the follow-up communication and emails after the interview.

Data Analysis

Since this is a small-scale, pilot-type interview study, interview notes were analyzed and juxtaposed for common themes and general findings. While the sampling of the interview participants is limited and a further analysis of the data may be necessary for a more in-depth discussion, some of the common insights emerged as themes. In what follows, we will review some of the findings that may help start a conversation on improving the tutor-tutee experience and the JTW program in general.

Findings and Discussion

For this essay, three main interview questions were designed and used:

1. *What do you most enjoy about being a JTW tutor?*
2. *What challenge(s) have you experienced when serving as a JTW tutor?*
3. *Do you have any suggestions on how we can improve the current tutor-tutee experience or the system in general?*

The following sections are thematized based on the common findings in the responses received from the interviewees. We will also add some discussion on similarities as well as differences among such responses where relevant and necessary.

Why they became JTW tutors.

Interestingly, some of the students interviewed for this essay disclosed that English was not their favorite subject growing up. This is noteworthy because one of the most distinctive characteristics of JTW tutors is that they are generally recruited based on their English proficiency. The JTW program being an English as a medium of instruction (EMI hereafter) program, its tutors overall have the strongest English skills compared to tutors of other similar programs (e.g., JLCC). What was instead common among all the interviewees was that they have always had an interest in intercultural communication to some extent. In fact, most of them expressed their excitement and enthusiasm about having international friends on campus.

Haruto: I enjoy being a JTW tutor because I get to see JTW students regularly and I feel like I'm studying abroad without leaving Japan.

Yua: Now, most of my friends at Kyudai are international students. When I entered the university, I got bored quickly because all my classes were…you know. I had no interest in English but I saw an email call for international students' helpers and I thought to myself, "this is it!"

Shogo: I definitely have more friends than before I became a tutor!

Jun: Being a JTW tutor definitely makes my college life interesting and fun. I see them as my friends and not necessarily as tutees. Since I live in the dorm with them, I get to go out with them for meals and stuff.

In addition, having studied abroad previously, the following students appreciate the opportunities created by being a JTW tutor at Kyushu University:

Jun: It's hard to find an environment in Japan where I have to use English to communicate. Besides, the students are from all over the world, so I get to learn so many different cultures.

Akari: I'd always wanted to study abroad and that's why I applied to become a JTW tutor in the first place. I served as a tutor before my study abroad experience, then since I came back to Japan, I wanted to make sure that I don't forget English and that I continue to immerse myself in an international environment.

Mio: I wanted to study abroad in an English-speaking country and that's partially why I served as a tutor before I did my study abroad. Having lived in a foreign country, now that I'm back, I can kind of see things from their perspectives. I mean, the default state is that we all come from different religious beliefs and cultures. That's where we need to start. It seems simple enough, but we sometimes remain unaware of this important reality.

The other three students, Haruto, Yua, and Shogo also expressed their interest in studying or working abroad in the near future. It seems safe to say that all of the interviewees have a relatively positive outlook on their experience with JTW students. While the extent to which their JTW experiences influence their future trajectory may vary, for now, most students responded that they look forward to a career that fits their skills and experiences gained through being a JTW tutor.

What they have found challenging.

Although most interviewees appeared to have difficulty coming up with specific examples of the challenges and difficulties they have experienced being a JTW tutor, there were some common issues raised by multiple students. For example, some students brought up the lack of diversity among JTW students as one of the challenges. It appears that those who are serving as JTW tutors most likely (or are planning to) have a study abroad experience and/or are an active member of KUFSA (Kyushu University Foreign Students Association), KUIFA (Kyushu University International Friendship Association), SCIKyu

(Student Committee for the Internationalization of Kyushu University) and other similar student organizations.

Haruto: It's such a waste of opportunity that most Kyudai students don't even pay attention to programs like JTW. Only a limited number of students take action and get involved in JTW and so on. Most students are missing out, really.

Shogo: It's always the same people involved in the same stuff. If you do this (i.e., JTW tutor) for a long time, you find and become close to other like-minded Japanese students. But at the same time, that may be making it difficult for other new students to come join us.

This point was reiterated by other interviewees also that even the mandatory orientation for tutors may feel intimidating or uncomfortable to some first-timers because there is usually a group of experienced tutors that are familiar with all the procedures and act as such at the orientation. If those experienced tutors are acting too buddy-buddy with each other, newcomers may feel unwelcomed or that they do not belong. If left unaddressed, this could develop into a situation where new students feel alienated therefore unmotivated to continue being part of JTW as a tutor. It is something that the JTW team must take into account when planning and running the orientation for tutors.

Similar to the situation of a close-knit community of certain JTW tutors, there seem to be specific groups of international students and their tutors that are tightly bound. Sharing similar interests (e.g., language, culture), some tutors-tutees spend a considerable amount of time with each other.

Shogo: Sometimes, their bonds are so strong that I cannot really become part of their group. It's not that they are disrespectful or cold. They're polite and listen to me when I talk to them, but there's this…invisible divide.

Jun: Some students have their own clique. Groupings can be exclusive that it's difficult to mingle with someone else from another group.

This "invisible divide" may be further enacted as perception gaps between tutors. For example, the following students mentioned the diverse degrees of commitment tutors have about their tutor duties.

Haruto: Different tutors have different intentions for being a tutor.

Yua: Tutors have different expectations and so do the tutees. If their expectations don't match, the tutor-tutee relationship may not turn out well.

Akari: Some tutors are more involved than others.

Mio: I've heard that there are some tutors that go "missing" after a while, and the JTW students don't really have any contact or support from their tutors…it's really bad.

This story of "missing tutors" has been echoed by more than a few tutors we interviewed for this essay. Therefore, we would like to delve deeper into this issue as a separate theme below.

Tutors who go "MIA" (Missing in action).

At the outset, all students who have been selected as JTW tutors may have great intentions and expectations for their upcoming responsibilities. However, some of them seem to become rather absent once the reality of academic and personal life hits. The interviewees pointed out that there are different reasons why such tutors may go "missing."

Dormitory or not

As mentioned earlier by Jun, living on or near campus seems to influence the frequency and quality of time a tutor and tutee may spend together. While two of the interviewees live in the dormitory on campus, two live near campus, and the other two live with their parents at home in the city, most tutors enjoy being able to meet frequently or even run into each other on campus.

Shogo: It's fun to stay in touch with the JTW students. Since I live close to campus, I get to regularly participate in events at the dormitory.

Yua: We have a small-group dinner party every Friday where some of us cook and bring food.

Due to the location of our campus, it may be difficult for tutors who live off campus to attend these types of casual and spontaneous events, especially if they run late. Since these events may also serve as a place where tutors and tutees interact with one another beyond the mere tutor-tutee relationship under the program's watch, accessibility may be the key to diversifying and strengthening the existing relationship between tutors and tutees.

Different degree of interest and commitment

Just as diverse as the JTW students' backgrounds are, there seems to be a diversity of interest and commitment their tutors hold. They can be broadly categorized into two types of tutors. There are "some tutors who are always present and others who never show up to any events," to borrow Haruto's words. Shogo and Yua also mentioned that there are tutors that they have never seen in person. Haruto worries about the tutees whose tutors are hard to reach.

Haruto: I feel bad for those JTW students whose tutors are never there for them.

Yua: Some tutor-tutee pairs don't contact each other so that they have a hard time to even remember their partner's name…it's a shame.

This mismatch of expectations and emotion seems to go both ways. Some of the interviewees revealed their own experience of feeling unwanted when their tutees kept their distance or took a long time to respond to a text message, for example. Although this type of mismatched feeling may happen in any relationship, what may be concerning here is that some of the tutors or tutees whose partners have vanished often feel lost all alone. This may be where we as the JTW team need to work on and come up with a set of remedies.

For example, when Akari was undergoing some miscommunication with her tutee in the past, she

was not sure where to seek help from, except reporting in the monthly activity report that all tutors are required to submit to the administrative office.

Akari: I texted my tutee and was waiting to hear from her, but I just kept waiting and nothing happened. Then, I learned from others that she was going through a personal crisis of some sort. I didn't know how to help her, or at what distance I should keep from her. I didn't have anyone to seek advice from in these types of situations…

Yua: Some tutees expect regular and frequent contact when their tutors may not. It's probably difficult to match both sides' expectations perfectly, but at least as tutors, we need to be a little more aware of the situation the international students are in.

Haruto: Some Japanese students don't know how to approach foreign students, so sometimes they may completely avoid contact. Some may feel they don't wanna overstep the boundaries or look overly enthusiastic in their relationship with their foreign friends.

Based on the above, we start to understand that it is not simply a matter of busy schedule or mismatched expectations on both ends of tutors and tutees. Rather, it seems to be a combination of multiple factors including not knowing exactly how and what they are supposed to do beyond the responsibilities and duties outlined by the university.

Tutor networking event as a potential solution?

To address and possibly alleviate some of the issues discussed above, one common suggestion proposed by four of the six interviewees was a "tutor networking event."

Shogo: It would be great if there were tutor networking events where tutors get together and talk freely to one another.

Mio: We have a leader, assistant leaders, and other regular tutors in the current JTW tutor system. But, I think only the active members of the community know who the leader or assistant leaders are. Right now, there are no real opportunities during the semester for us to get to know who's who in the program. If we could arrange a monthly open event where tutors and maybe tutees also can come to mingle with each other, that would be perfect.

Akari: I think it's important to build a sense of community among the tutors. There are only a few times during the year when tutors see each other in person. And even for the orientation, not everyone can attend due to the schedule conflicts. But, we should definitely utilize those few face-to-face opportunities to do something about building a sense of community.

Haruto: There should be some type of mandatory meeting that tutors attend, otherwise, it would be nearly impossible to bring us (tutors) in one place…

It is indeed tricky to coordinate and hold a meeting or event for tutors because of the scheduling and flexibility issues, as noted by a few interviewees. Also, there may be different ways to approach this, in

terms of who gets involved in the process of designing, organizing, and running such events. For example, there is a top-down approach in which the JTW team design and regulate these events. By doing so, the event may become less of a student-led, autonomous activity, yet, the attendance may be reinforced and monitored closely. Or, the JTW team may take part in the process of these events, but largely stay behind-the-scenes to let the students take the reins. Further, the JTW team may simply remain as a faraway observer but make ourselves available if anything goes awry. The degree of our involvement as the JTW team must be carefully discussed and planned.

In addition to the specific plans of action including the above-discussed tutor networking events, an ideological approach to improving the tutor-tutee experience was shared by Haruto and a few others.

Haruto: I think it's important for us tutors to remind ourselves that we need to be proactive and take action instead of waiting for the international students to approach us.

This type of mentality seemed prevalent among all six interviewees. This may be an important frame of mind that needs to be emphasized by the JTW team as well as by experienced tutors to their fellow new tutors during the orientation for tutors and subsequent events such as the above-proposed networking event.

Conclusion: Summary and Afterthought

For this essay, we first reviewed the student helper system at Kyushu University and focused on JTW tutors to look into the program from their perspectives. Six JTW tutors were interviewed in order to bring forward the status quo, challenges, and suggestions for improvement for the current tutor-tutee system as well as the JTW program at large.

Through face-to-face individual interviews, the six interviewees revealed specific reasons for their decisions to become a JTW tutor, what they enjoy, and what they are concerned about, in a relatively open manner. Although experienced and well-networked, most interviewees addressed the need to establish some type of support system for tutors (= "a sense of community" as articulated by Akari) because many of the tutors feel alone when they face issues that are beyond the responsibilities and duties outlined by the university.

In response to these needs, one common suggestion proposed by four of the six interviewees was to organize a tutor networking event. While there may be different styles and approaches to put such a plan into action, what appears to be the key in helping to improve the overall quality of tutor-tutee experiences is for us JTW team members to stay connected and available to the tutors as much as we do for the JTW students. Through designing to conducting to analyzing the interviews, we were able to gain insight into the tutor-tutee experiences which definitely helped us to locate specific areas we as the JTW team should address and improve.

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，153－160
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 153-160

2018年度　九州大学留学生センター・留学生指導部門報告（カウンセリング関係）

高　松　　里*

1．はじめに

九州大学留学生センター・留学生指導部門は、外国人留学生および留学生に関わる教職員・学生、さらには地域の人々を対象として、様々な活動を行っている。本報告は、留学生指導部門の活動の中で、カウンセリングに関連したものを掲載した。

留学生指導部門の活動は、①相談活動、②教育活動、③留学生への支援システムの形成、④研究・研修活動、⑤学内協力講座・委員会、⑥社会連携、である。

2．相談活動

（1）相談室および担当者

留学生センターは、センター本館があった箱崎キャンパスおよび伊都キャンパスに相談室を設けていたが、箱崎キャンパスは2018年８月に伊都に完全移転した。そのため、相談は主に伊都キャンパスで行われることになった。また必要に応じて、筑紫キャンパスや大橋キャンパスでも相談を受けている。

高松は臨床心理士・公認心理師であり、九州大学キャンパスライフ・健康支援センター（CHC）において、カウンセラー（留学生担当）としても活動している（兼務）。CHC には、非常勤の留学生担当カウンセラー（英語担当３名、中国語担当２名）が勤務している（詳細は、CHC 発行の「九州大学学生相談紀要・報告書」を参照のこと）。

（2）来談状況

相談室における相談件数は表１の通りである。ここでいう相談件数には、数分で終わるような簡単な情報提供は含まれていない。

①「留学生からの相談」は166件であった

最も多いのが「メンタルヘルス（105件）」であった。高松が心理カウンセラーであることを考えると当然である。不安、不眠、鬱、発達障害などの相談が多かった。学内外の医療機関への紹介もあった。

*九州大学留学生センター准教授

表1　九州大学留学生センター相談件数

留学生からの相談

		合計
修　学	入学・進学関係	0
	教育制度・内容	10
	進路相談	16
	研究室の人間関係	27
生　活	法律的問題	3
	経済的問題	0
	宗教的問題	0
	宿舎問題【国際交流会館】	0
	宿舎問題（その他）	0
	生活問題	0
	事故病気等	0
	渡日・滞日許可	0
	人間関係	2
	子弟の教育問題	0
	帰国準備	0
	メンタルヘルス	105
	国保・一般保険	0
その他	各留学生会	3
	その他分類不可	0
小　計		166

その他の外国人からの相談

	入進学	1
	その他	0
小　計		1

日本人からの相談

学　生	留学生とのトラブル	0
	海外留学情報	0
	国際親善会関係	0
	その他	34
教職員	入進学	0
	奨学金	0
	日本語関係	8
	コンサルテーション	57
	その他	0
外　部	情報・コメント	3
	留学生との交流	0
	入進学	0
	苦情	0
	その他	0
小　計		102
総　計		269

次いで「研究室の人間関係（27件）」であった。文化的背景や言語的な問題によって、指導教員や同僚の大学院生との関係が難しい。個人のカウンセリングだけでなく、指導教員等も同席してカウンセリングを行うこともあった。

「進路問題（16件）」は、卒業後の進路や就職についての相談があった。

「その他」は、3件であり、各留学生会の行事などについての相談、イスラム学生のイベント開催などについての相談などがあった。イスラム関連では、学内での礼拝場所の問題は継続課題となっている。

②「その他の外国人からの相談」は1件であった

本年度はごく少なかった。外部から大学院への入学に関する問い合わせがあった。

③「日本人からの相談」は、102件であった

最も多いのが「教職員」に対する「コンサルテーション（57件）」であった。コンサルテーションとは、教職員とカウンセラーとが共同して、留学生の問題の解決や軽減を図ろうとするものである。留学生のメンタルヘルス、大学に来ない、長期留年している、等の相談があった。

日本人学生からの相談が34件あるが、留学や進路についての相談があった。

「外部」からの相談は3件と少なかった。地域団体（国際化協会や警察など）との情報交換や情報提供があった。

3．教育活動

（1）オリエンテーション

①新入生オリエンテーション

留学課が主催して、新入留学生が入学してくる直前の9月と3月に「サポートチームオリエンテーション」、入学後の4月と10月に「新入留学生オリエンテーション」を実施しており、指導部門の教員はこれらのオリエンテーションに関与している。

また、2019年3月に、「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2019年度版」を

4,000部印刷発行し、九州大学の入学式後のオリエンテーション等で配布した。

②キャンパスライフ・健康支援センター関連オリエンテーション

- 4月9日（月）:「他大学出身大学院生のためのオリエンテーション」（箱崎地区）
- 4月10日（火）:「他大学出身大学院生のためのオリエンテーション」（伊都ウエスト地区）
- 5月25日（金）:「他大学出身大学院生のためのオリエンテーション」フォローアップ企画（①箱崎散策、②懇親会）

③その他のオリエンテーション

- 5月23日（水）: 分子システムデバイス国際リーダー・武者修行送り出しオリエンテーション「異文化におけるストレスマネージメント」講師

（2）授業

2018年度担当の授業は以下の通りである。

①学部基幹教育フロンティア科目「**日本事情**」（前期セメスター、水曜日4限、担当教員は高松里）

留学生50数名、日本人学生50数名（留学生数に合わせて受講生制限をかけている）で実施された。自己紹介から始まり、様々な話し合い、ゲーム、料理などを通して、文化の違う人がどう理解しあえるかを考えた。

②大学院基幹教育「**異文化理解の心理学**」（後期セメスター、金曜日5限、担当教員は高松里およびキャンパスライフ・健康支援センターの小田真二）

留学生と日本人学生を合わせて15名ほどで実施された。出身国や出身地の紹介（パワーポイント）を行い、ライフストーリーを語ることなどを通して、お互いの文化の違いについて検討した。

③大学院人間環境学府「**異文化適応論**」（後期集中3日間）

異文化の新しい定義、経験を言語化すること、質的研究の基本、インタビューの実習などを行った。

④日韓共同理工系学部留学生予備教育「**日本文化・日本事情**」（木曜日3限他）

フィールドトリップとして、「防災センター訪問」「太宰府および国立博物館見学」「留学生歓迎茶会参加」「長崎原爆資料館および三菱造船所見学」などを行った。また「入学後の生活」について講義を行った。

4．留学生に対する支援システムの形成

（1）サポートチームおよびチューターへの支援

①学部サポートチーム

学部留学生（1年生）に対しては、指導部門教員がサポートチームの指導にあたった。

②日韓共同理工系学部留学生予備教育サポートチーム

10月に来日した予備教育留学生のためのサポートチーム（6ヶ月）の選考および評価を行った。

（２）初期適応支援

学部留学生に対しては、入学直後に「履修説明会」を行っている。ここで授業（日本語や日本事情）について説明すると共に、日本人学生の特徴や友達の作り方を説明している。また、前期には基幹教育「日本事情」を行い、日本人との接触機会を提供している。

後期には、大学院基幹教育「異文化理解の心理学」において、日本人との交流と文化理解の機会を提供している。

その他、指導部門教員が顧問をしている社会人ボランティア団体（そら）によって「市内ツアー」などが実施され、留学生が日本社会に適応しやすいように支援している。

（３）学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生の団体や、学生サークルの顧問となっている。

①九州大学留学生会（KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association）

九大に所属する全留学生を代表する会である。４月に「スポンサーミーティング」が行われ、１年間の活動について、地域の支援団体と共に検討を行った。その他、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

②九州大学ムスリム学生会（KUMSA=Kyusyu University Muslim Student Association）

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生（約350人）の団体である。

イスラムウィーク（パネル展示、イスラム衣装の紹介、アラビア書道、映画、講演、お菓子、各国の料理提供）が、九大ムスリム学生会が主催し、図書館、国際親善会、留学生センターが協力する形で実施された。

- ５月７日（月）：箱崎キャンパス
- ５月８日（火）：筑紫キャンパス
- ５月９日（水）：大橋キャンパス
- ５月10日（木）：伊都キャンパス
- ５月12日（土）：バドミントン大会
- ５月13日（日）：講演会およびイスラムフードフェスティバル（伊都ゲストハウス）

また、ラマダン（断食月）に関連してイフタールパーティが実施された。

③九州大学国際親善会（KUIFA=Kyushu University International Friendship Association）

毎年の活動としては、５月から行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」などである。また、箱崎のコーヒーアワーは終了し、伊都地区で毎週水曜日に「全学コーヒーアワー」（センターゾーン）を行っている。

- ５月23日（水）：基幹教育「日本事情」にシンガポール学生５人がゲスト参加した（Inter Link FUKUOKA）。

（4）ボランティア団体への助言・指導

「九州大学留学生サポートネットワーク〈そら〉」の活動への助言

〈そら〉は、社会人を中心としたボランティア団体である。主な活動としては、新入留学生を対象とした４月の花見、10月の市内ツアー、井尻国際交流会館における「日本語交流」、伊都協奏館での文化イベント（「七夕イベント」等）企画などである。

５．研究・研修活動

（1）著書・論文・報告

大河内範子・田村節子・高松里（2018）．膠原病患者を対象としたサポート・グループの実践．心理臨床学研究、36(5)、545-555.

福盛英明・一宮厚・松下智子・吉良安之・船津文香・小田真二・高松里（2019）．大学生の Quality of College Student Life の学年別の特徴の分析．九州大学学生相談紀要・報告書、第5号、17-27.

小田真二・高松里・福盛英明・船津文香・松下智子・吉良安之（2019）．他大学出身の大学院入学者に向けた心理的支援：2017 ～ 2018年度の実践から．九州大学学生相談紀要・報告書、第5号、29-35.

高松里・江志遠（2019）．九州大学における留学生カウンセリングの特徴．九州大学学生相談紀要・報告書、第5号、37-44.

船津文香・福盛英明・松下智子・吉良安之・小田真二・高松里（2019）．大学における学生相談活動の特色のアセスメントに関する研究 ―「学生相談機関充実イメージ表」・「Cube モデル」による分析 ―．九州大学学生相談紀要・報告書、第5号、45-54.

高松里（2019）．2017年度外国人留学生対象の相談実施状況．九州大学学生相談紀要・報告書、第5号、75-80.

高松里（2019）．留学生のことをもっと知りたい日本人学生・教職員のための留学生超入門2019年度版．九州大学留学生センター

（2）学会発表等

小田真二・吉良安之・高松里・福盛英明・松下智子・船津文香（2018）．他大学出身の大学院入学者向け支援の４年間の取り組み．日本学生相談学会第36回大会論文集、62.

高松里（2018）．留学生カウンセリングの現状と課題 ― 2016年度「学生相談室」統計より．日本学生相談学会第36回大会論文集、97.

大河内範子・田村節子・高松里（2018）．膠原病サポート・グループ参加によるメンバーの心理的変容過程．日本心理臨床学会第37回大会発表論文集、281.

大河内範子・高松里・宮腰辰男・板東充彦・村山正治（2018）．対象者の特性に応じたサポート・グループの作り方 ― 先行事例から考える．日本心理臨床学会第37回大会発表論文集、471.

村山尚子・高松里・村久保雅孝・北田朋子・木村太一・平井達也・都能美智代・村山正治（2018）．音楽を媒介としたコミュニティの形成と参加者の体験について ―「わたしたちの自由音楽会」―．日

本人間性心理学会第37回大会プログラム・発表論文集、44.
板東充彦・高松里（2018）．ひきこもり者の“普通”へのとらわれから脱して開眼したひきこもり者の世界観．日本人間性心理学会第37回大会プログラム・発表論文集、54.
本山智敬・高松里・村久保雅孝・永野浩二・村山正治（2018）．日本におけるオープンダイアローグの今後の可能性 ― フィンランドでの視察研修からの検討 ―．日本人間性心理学会第37回大会プログラム・発表論文集、68.

（3）研究活動

【2018年】

- 4月8日（日）：ワークショップ「自由音楽会・試奏会」（九大箱崎キャンパス）
- 4月28日（土）：21世紀研究所セミナー「PCA・オープンダイアローグ・PCAGIP ― 比較検討・相互の可能性・実践力」出席（福岡市）
- 4月29日（日）：ワークショップ「自由音楽会」実施（九大箱崎キャンパス）
- 5月26日（土）：「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」スタッフミーティング（福岡市）
- 6月29日（金）～7月2日（月）：「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」実施

【2019年】

- 1月12日（土）13日（日）：人間関係研究会スタッフミーティング出席（神戸）
- 2月17日（日）：「スロー・エンカウンター・グループ in 沖縄」スタッフミーティング（福岡市）

6．学内協力講座・委員会・その他

学内での委員等は以下の通りである。

①留学生センター関係委員会

- 日韓共同理工系学部留学生コーディネーター会議

②学内協力講座関係

a）人間環境学府関連

- 人間環境学府附属総合臨床心理センター研究員

b）キャンパスライフ・健康支援センター関連

- センター委員会
- 学生相談カウンセリング部門会議
- 事例検討会
- 相談担当実務者ミーティング
- 非常勤カウンセラーミーティング
- 学生相談室会議
- 学生相談地区別連絡会議
- 「他大学からの新入大学院生オリエンテーション」およびアフターケア

- 常勤カウンセラー研修会
- 研究推進会議

③学内 FD 等

- 11月30日（金）：全学 FD「大学コミュニティにおける事件・事故等への対応について」出席
- 12月６日（木）：工学研究院化学工学部門 FD「留学生のメンタルヘルスと指導について」講師

※その他、月１回、キャンパスライフ健康支援センター FD/SD に出席

④その他

【2018年】

- ６月15日（金）：イーストゾーン留学生支援室運用ワーキンググループ（オブザーバーとして出席）。「多目的室（礼拝室を兼ねる）」についても話し合われた。
- ７月24日（火）：G30コーディネーター（工学部、農学部）との連絡会議
- ８月１日（水）：共創学部の新入留学生へのサポート・チーム選考（サポートセンター）
- ８月22日（水）：イーストゾーン留学生支援室運用ワーキンググループ（オブザーバーとして出席）

【2019年】

- ３月７日（木）：九大病院「子どもの心の診療部」との打ち合わせ

７．社会連携

- ４月１日（日）：福岡大学国際センターにて講演「異文化ストレスとその付き合い方」（福岡大学新入留学生対象）
- ７月12日（木）：佐賀大学医学部保健学科にて講演（高松）
- ９月12日（水）：福岡大学留学生別科（交換留学生も含む）にて講演「異文化ストレスとその付き合い方」（福岡大学）
- ９月21日（金）：立命館アジア太平洋大学常勤カウンセラーとの意見交換
- ９月28日（金）：犯罪被害者ホッとステーションふくおか・創立１周年記念シンポジウム（対談担当）
- 10月13日（土）21日（日）27日（土）：難病ピアサポーター養成講座講師（福岡県難病相談支援センター主催）
- 12月12日（水）：JICE（日本国際協力センター）にて講演「留学生のメンタルケアについて」（北九州市）
- ２月２日（土）：福岡難病相談・支援センター・ピアサポート講座にて講演「『話を聴く』とはどういうことか？」（福岡市）
- ３月３日（日）：大正大学にてスーパービジョン「セクシャルマイノリティのためのサポート・グループ」（東京）
- ３月27日（水）：福岡県警国際捜査課との打ち合わせ（最近の留学生の様子＋通訳者募集について）

8．その他

- 5月9日（水）：北海道大学国際本部相談室の相談員による調査電話（九大の留学生相談状況について）
- 5月23日（水）：九大広報担当者が基幹教育「日本事情」見学および写真撮影（九大広報に掲載予定）

9．おわりに

留学生センターは過渡的な状況にある。数年後には何らかの改組が行われるだろう。

そのとき、カウンセリングを中心とする相談体制をどのようなものにするのか、キャンパスライフ・健康支援センターとの連携はどのようなものが良いのか、改めて検討することになる。

留学生が増え、メンタルヘルスの問題が増えた。また、事件や事故も増え、長期留年者も毎年のようにいる。異文化環境において、精神状態をノーマルに保つのは簡単なことではない。教職員もまた留学生指導で苦労をしている。様々な方法で、各部局が連携を組みながら、さらに増えるだろう留学生に対応していく必要がある。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，161－162
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 161-162

令和元年度スーパーグローバル大学創成支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場Ⅰ＆Ⅱ」

Super Global University Initiative Lecture Series “Work in the World”

生　田　博　子*

１．はじめに

スーパーグローバル大学創成支援事業とは、国の政策として高等教育の国際競争力を向上させ、グローバル人材の育成を図るため、世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速することを目標として、大学内の体制強化や国際化を進める大学を重点的に支援する制度である。トップ型大学13校（世界大学ランキングトップ100を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象）とグローバル化牽引型大学24校（これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学を対象）が選抜され、本学はトップ型に選ばれた。本章では本学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として開講されている「学部生・大学院生共通基幹教育科目・世界が仕事場Ⅰ＆Ⅱ」について報告する。

２．「世界が仕事場Ⅰ＆Ⅱ」

２．１．目的

「世界が仕事場」は、九州大学留学生センターにおけるスーパーグローバル大学創生支援事業の一環として、グローバル人材とは何かを探求する日本人学生を対象に開講された授業である。一般に大学が提供する留学支援は、語学の授業、留学プログラムや奨学金制度の充実、留学カウンセリングなどが挙げられるが、学生の海外留学や海外でのキャリアへの興味を引き出し、涵養することを目的にしたカリキュラムの例は少ない。近年、日本人学生の海外留学の減少が懸念されており、留学目的や意識・意欲の変化などの理由が挙げられている。九州大学も例外でなく、スーパーグローバル大学調書では日本人留学生派遣促進に関する取り組みを提唱するも、留学希望者が増えないことへの懸念から、学生の自主性、広報活動だけに頼らず新たな取り組みが求められていた。本コースは、そのような状況を打開すべく、基幹科目として全学の学部生、大学院生、留学生を対象に企画したものである。

４年目を迎えるこの授業では、単に短期留学や海外での研究経験があるというだけでなく、海外の大学や大学院で学位を取得し、世界の第一線で活躍している日本人（国連職員、研究者、NPO 代表、起業家、ジャーナリストなど）が、それぞれの仕事や生き様を語り、異文化や海外体験を含む、幅広

*九州大学留学生センター准教授

い体験の意義や意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得ることを目的としている。学生たちには、海外で活躍する人々も、色々な事に悩み、失敗を重ね、試行錯誤しながら、国際社会の中でキャリアを築き人生を歩んできたということを知り、生き方の多様性を学ぶことを期待している。

2．2．実践

本コースは①講師による講義と質疑応答、②「問いとコメント」、③グループディスカッションと発表、が３本の柱となっている。秋学期と冬学期に開講し、全16回の講義はオリエンテーション１回、外部招聘講師９名と本学教員２名による講義11回、グループディスカッション５回から構成される。受講生は、毎回の授業で、講義に関する短いレポートの提出、ディスカッションへの積極的な参加が求められている。今年度の秋学期の履修者数は、全部局より学部生184名、大学院生31名、非正課生（留学生）６名の221名、冬学期の履修者数は、学部生172名、大学院生31名、非正課生（留学生）６名の209名で、履修登録者数は年を追うごとに増加している。また聴講生が多く、本学教職員も積極的に聴講している。

2．3．成果

本学の大学間交換留学申請者の多くは、本授業の受講生であり、学生や教職員から地球市民、グローバル人材を考える上で、大変有意義な講義であるとのフィードバックを頂いている。学外からの参加や見学などの依頼等も多い。

3．まとめ

本授業は、九州大学に在籍する日本人学生や留学生に、国際社会の現代における人生の選択肢、個々がグローバル人財として要素の探求などを狙いとしている。グローバル人材の育成や大学のグローバル化の達成にはさまざまなアプローチがあるが、学生の意識を変えていくことも大学の国際化に大きく貢献する。

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，163－167
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 163-167

官民協働海外留学支援制度
「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」

“About Tobitate! (Leap for Tomorrow) Study Abroad Initiative”

生　田　博　子*

1．「トビタテ！留学 JAPAN」日本代表プログラムとは？

1－1　概要：

官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～（以下、トビタテ）は、文部科学省企画・運営による、民間企業からの支援を活用した留学促進のためのプログラムである。日本国籍もしくは永住権を有し国内の高等教育機関に在籍し、産業界を中心に社会全体に貢献・還元する意欲のある学生の留学を主な支援対象とする。2014年度から開始され、年２回500名ずつの募集で1000名、2018年度より400名ずつの募集で800名の留学支援を計画している。2020年１月現在、第12期が二次審査選考と第13期の募集が行われている。

1－2　目的：

過去約10年間における日本人海外留学生数の継続的な減少をうけて、今後海外留学経験者数を倍増させる為の取り組みの一環として企画された。「日本再興戦略～ JAPAN is BACK」（2013年６月14日閣議決定）で掲げられた目標である、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年までに、大学生の海外留学12万人（現状６万人）、高校生の海外留学６万人（現状３万人）への倍増をトビタテの公式目標としている。トビタテの支援による海外留学を経験した学生は、将来的な社会貢献の一環として、支援企業と共にグローバル人材コミュニティを形成し「産業界を中心に社会で求められる人材」または「世界で、又は世界を視野に入れて活躍できる人材」へと育成される。また、帰国後は海外体験の魅力を伝える活動を通して、日本全体の留学機運を高めることに貢献することが期待されている。

1－3　特徴：

以下の４つのコースが設けられている：

１）「理系、複合・融合系人材コース」（対象：理系分野で留学する学生）

２）「新興国コース」（対象：新興国へ留学する学生）

*九州大学留学生センター准教授

3）「世界トップレベル大学等コース」（対象：世界トップランキング上位大学に留学する学生）
4）「多様性人材コース」（対象：スポーツ、芸術、政治など様々な分野において留学する学生）

- この他、地方の高等教育機関と民間企業の連携により海外留学希望学生を募る「地域人材コース」が設けられている。
- 支援期間は最短28日から最長２年間の海外留学。
- 海外の大学等で講義受講などの学修活動をするのみならず、インターンシップやボランティア活動などの実践的な活動を盛り込んだ留学計画を募集している。
- 2019年８月13日現在、多様な分野でグローバル・ビジネスを展開する企業244社が117.2億円の資金を提供している。
- 選考は書面審査（一次選考）と面接審査（二次選考・最終選考）の２段階から成る。
- 第８期より、「理系、複合・融合系人材コース」の中に、支援人数を20％程度とする「未来テクノロジー人材枠」が設置された。日本の未来を切り開く以下の６つのテクノロジー分野に対して強い興味と高いポテンシャルを持ち、将来当該分野で日本をリードしていく意思を持った人材を育てることを目的としている。

２．九州大学の実績 と支援体制

最終審査結果が出ている第11期までに、本学からの応募者数は365名、一次審査合格259名、最終審査合格166名（合格率45％）で、全国第５位の合格実績を誇る。現在２次審査中の第12期は、48名が応募、30名が一次審査に合格した。１期から12期までの部局別申請者数を見ると、工学部からの応募者が74名と最も多く、芸術工学研究院の71名、農学部35名と続く（資料１）。

九州大学の国際戦略の一つとして、海外留学派遣人数を増やすというのがあり、その中でもトビタテは、総長を始め執行部も大変注目し、留学生センター教員１名、留学生課職員８名の９人体制で全学トビタテ支援をしている。応募者数そのものの伸び悩みを改善するため、７期までは全学スタッフのみが学生への周知やサポートに努めていたが、その後、留学者数・トビタテ応募者数そのものを増やすために、全学チームが部局と積極的に連携し、教員への周知・教育をしながら学生支援を行うという戦略を展開している。

（資料１）

トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム　部局別の申請者数～合格者数～留学者数（第1期～第12期）

R1.12.9現在

（単位：人）

	部局名	累計						H31年度（R1年度）申請						H30年度申請												H29年度申請					
								12期（R2.4.1～R2.10.31出発）						11期（R1.8.10～R2.3.31出発）						10期（H31.4.1～R1.10.31出発）						9期（H30.8.11～H31.3.31出発）					
		申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者
学部	文学部	19	14	1	6	0	6	2	2					2	1		1		1	1	1		1		1	1	1		1		1
	教育学部	10	7	2	4	0	4	1	1																						
	法学部	27	18	1	7	0	7	5	4											4	3	1	2		2	3	1		1		1
	経済学部	31	20	1	9	3	6	5	2					3	1		1	1		2	1					1	1		1		1
	理学部	10	9	0	4	0	4	2	2					1	1		1		1	1	0										
	医学部	10	8	2	5	2	3	1	1					1	0					1	1	1									
	歯学部	2	1	0	1	0	1							1	0																
	薬学部	2	0	0	0	0	0	1	0																	1	0				
	工学部	42	31	6	19	2	17	2	0					4	1		1		1	4	4	1	3	1	2	1	0				
	芸術工学部	31	24	2	15	0	15	1	1					3	0					2	1					3	2		1		1
	農学部	9	9	3	3	0	3																			1	1		0		
	21世紀プログラム	34	25	0	18	2	16	1	1					3	2		2	1	1	1	0										
	共創学部	10	6	0	1	0	1	8	5					1	0					1	1		1		1						
	小計	**237**	172	18	**92**	9	**83**	**29**	19	0	**0**	0	**0**	**19**	6	0	**6**	2	**4**	**17**	12	3	**7**	1	**6**	**11**	6	0	**4**	0	**4**
大学院	人文科学府	4	4	0	1	0	1	2	2					1	1		0			1	1		1		1						
	地球社会統合科学府（比文）	8	3	0	2	0	2																			1	0				
	人間環境学府	17	11	1	7	0	7	2	2					4	2	1	1		1	4	2		2		2						
	法学府	3	2	0	2	0	2																								
	経済学府	1	1	0	1	1	0																								
	理学府	4	1	0	1	0	1													1	0					1	0				
	数理学府	1	1	0	0	0	0	1	1																						
	システム生命科学府	7	5	0	3	0	3							1	1		0														
	医学系学府	4	3	0	2	0	2																								
	歯学府	0	0	0	0	0	0																								
	薬学府	2	1	0	1	0	1							1	0		0														
	工学府	32	23	3	14	1	13	3	3					3	2		2	1	1	6	5	1	3		3	1	0				
	芸術工学府	40	29	0	16	2	14	5	4					5	3		3	1	2	10	7		4	1	3	5	4		2		2
	システム情報科学府	5	4	0	2	0	2	1	0																	1	1		0		
	総合理工学府	19	13	1	7	0	7													1	0					2	0				
	生物資源環境科学府	26	20	1	13	3	10	5	5					2	0		0			5	4		3	1	2	1	1	1			
	統合新領域学府	2	1	0	1	0	1																								
	その他（他大学への進学）	1	1	0	1	0	1																								
	小計	**176**	**123**	6	**74**	7	**67**	**19**	17	0	**0**	0	**0**	**17**	9	1	**6**	2	**4**	**28**	19	1	**13**	2	**11**	**12**	6	1	**2**	0	**2**
	合計	**413**	**295**	24	**166**	16	**150**	**48**	36	0	**0**	0	**0**	**36**	15	1	**12**	4	**8**	**45**	31	4	**20**	3	**17**	**23**	12	1	**6**	0	**6**

【備考】

原則として留学時の所属により作成

（単位：人）

		H29年度申請						H28年度申請												H27年度申請											
		8期（H30.4.1～H30.10.31出発）						7期（H29.8.18～H30.3.31出発）						6期（H29.4.1～H29.10.31出発）						5期（H28.8.19～H29.3.31出発）						4期（H28.4.1～H28.10.31出発）					
	部局名	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者	申請者	1次合格者	うち辞退者	2次合格者	うち辞退者	留学者
学部	文学部	1	0											4	3	1	2		2	1	0					3	3		0		
	教育学部	1	0					1	1	1				1	1		1		1	1	1		1		1	3	2	1	1		1
	法学部	5	2		2		2	3	3		1		1													2	2		1		1
	経済学部	3	2		1		1							3	2		2	1	1	4	3	1	1		1	2	2		0		
	理学部	2	2		1		1													1	1		1		1	2	2		1		1
	医学部	1	1		1	1		1	0					4	4	1	3	1	2							1	1		1		1
	歯学部																									1	1		1		1
	薬学部																														
	工学部	7	6	3	2		2	3	3		3		3	6	5	1	3	1	2							6	6		4		4
	芸術工学部	2	2		1		1	3	3	1	1		1	2	2		2		2	8	7		6		6	1	1		1		1
	農学部	2	2		1		1	1	1	1				1	1	1				1	1	1				2	2		2		2
	21世紀プログラム	2	1		0			3	2		1		1	3	2		2		2	2	2		2		2	4	4		3	1	2
	共創学部																														
	小計	26	18	3	9	1	8	15	13	3	6	0	6	24	20	4	15	3	12	18	15	2	11	0	11	27	26	1	15	1	14
大学院	人文科学府																														
	地球社会統合科学府（比文）	1	0																	1	0					3	2		1		1
	人間環境学府	2	2		2		2							1	1		1		1												
	法学府							1	0					1	1		1		1												
	経済学府																														
	理学府																														
	数理学府																														
	システム生命科学府																									1	1		1		1
	医学系学府							1	1		1		1							2	2		1		1	1	0				
	歯学府																														
	薬学府																			1	1		1		1						
	工学府	5	3		2		2	1	1	1				4	4	1	3		3	2	2		1		1						
	芸術工学府	6	4		3		3							2	2		2		2	2	1		0			2	2		0		
	システム情報科学府	1	1											1	1		1		1							1	1		1		1
	総合理工学府	3	1	1				3	3		2		2	2	2		2		2	2	2		2		2	1	1		1		1
	生物資源環境科学府	1	1		1		1							3	3		3		3	1	1		1	1	0	1	1		1	1	0
	統合新領域学府																									1	1		1		1
	その他（他大学への進学）	1	1		1		1																								
	小計	20	13	1	9	0	9	6	5	1	3	0	3	14	14	1	13	0	13	11	9	0	6	1	5	11	9	0	6	1	5
	合計	46	31	4	18	1	17	21	18	4	9	0	9	38	34	5	28	3	25	29	24	2	17	1	16	38	35	1	21	2	19

（単位：人）

	部局名	H26年度申請 3期（H27.8.21～H28.3.31出発） 申請者	1次合格者	うち辞退者	**2次合格者**	うち辞退者	留学者	H26年度申請 2期（H27.4.1～H27.7.10.31出発） 申請者	1次合格者	うち辞退者	**2次合格者**	うち辞退者	留学者	H25年度申請 1期（H26.8.21～H27.3.31出発） 申請者	1次合格者	うち辞退者	**2次合格者**	うち辞退者	留学者
学部	文学部	3	2		0			1	1		1		1						
	教育学部	2	1		1		1												
	法学部	1	1		0			2	2		0			2	0				
	経済学部	4	4		3	1	2	1	1		0			3	1		0		
	理学部	1	1		0														
	医学部																		
	歯学部																		
	薬学部																		
	工学部	5	5	1	3		3	1	1		0			3	0				
	芸術工学部	1	1		1		1	2	2	1	1		1	3	2		1		1
	農学部	1	1		0														
	21世紀プログラム	2	2		2		2	6	6		3		3	7	3		3		3
	共創学部																		
	小計	**20**	18	1	**10**	1	**9**	**13**	13	1	**5**	0	**5**	**18**	6	0	**4**	0	**4**
大学院	人文科学府																		
	地球社会統合科学府（比文）							1	1		1		1	1	0				
	人間環境学府							1	1		1		1	3	1		0		
	法学府	1	1		1		1												
	経済学府							1	1		1	1	0						
	理学府	1	1		1		1							1	0				
	数理学府																		
	システム生命科学府	4	3		2		2							1	0				
	医学系学府																		
	歯学府																		
	薬学府																		
	工学府	1	1		1		1	1	1		1		1	5	1		1		1
	芸術工学府	1	1		1		1	1	1		1		1	1	0				
	システム情報科学府																		
	総合理工学府	2	2		0			1	1		0			2	1		0		
	生物資源環境科学府	3	3		3		3	1	1		1		1	3	0				
	統合新領域学府													1	0				
	その他（他大学への進学）																		
	小計	13	12	0	**9**	0	**9**	7	7	0	**6**	1	**5**	**18**	3	0	**1**	0	**1**
	合計	**33**	30	1	**19**	1	**18**	**20**	20	1	**11**	1	**10**	**36**	9	0	**5**	0	**5**

九州大学留学生センター紀要，2020，第28号，169－170
Res. Bull. International Student Center, Kyushu U.,
2020, No.28, 169-170

留学生センターFD会2019

Faculty Development Meeting for the International Student Center 2019

はじめに

2020年１月30日（水）、留学生センターFD会を開催した。留学生センター内外から15名程度の出席者があり、嶋内佐絵氏（首都大学東京・国際センター准教授）による講演と討論が行われた。非常に活発な討論が交わされ、充実した催しとなった。以下に講演要旨を掲載する。

文責：今井亮一（留学生センターFD委員）

留学生センターFD会2019年度
日時：2020年１月30日（木）16：40－18：40
場所：日本ジョナサン・KS・チョイ文化館（中山ホール）
講演者：嶋内佐絵先生（首都大学東京・国際センター准教授）
演題：大学『国際化』の教育社会学的考察　―英語化・学際化に注目して―

講演概要

高等教育の国際化は、教育の国際化、研究の国際化、キャンパスの国際化など様々な側面をもつが、「国際化」そのもの自体の実態は各国・各高等教育機関のコンテクストによって多様な様相を持つ。本講演では、まず講演者が所属する東京都立大学（2019年度まで首都大学東京）の国際化をケースとして共有しつつ、その中で起きている教育の「英語化」と「学際化」について、これまでの研究成果や海外の事例と比較をしながら議論を行った。

具体的に、東京都立大学国際センターではグローバル人材育成入試を経て入学する学生に国際副専攻（Global Education Program）を提供し、半年ないしは１年間の留学を義務付けつつ、様々な学問領域の授業科目を英語で提供している。授業で扱うテーマはジェンダー、環境、歴史、異文化コミュニケーション、その他社会問題など多岐にわたり、グローバルスタディーズから人文地理学まで様々なディシプリンを持つ教員が授業を担当している。海外でも近年増えているHonours Programなどとの比較から、副専攻とHonours Programとが共通して持つ選抜機能と学際性がどのような意味で異なるのかを検討し、副専攻をはじめ日本における様々な学際的なプログラム（「文理融合」、「教養」などの看板の下行われているものも含む）における選抜や学際の実態がどのようなものなのかを会場からの質問も受けながら議論した。

次に英語化については、世界におけるEMI（English-medium Instruction）の拡大の様子を踏まえつつ、英語化が単なる言語変換ではなく地政学的・思想的な現象であり、大学のエコシステムに大きな

影響を及ぼすものであると捉えた上で、日本の大学における英語化の背景を、国際的要因（留学生獲得競争、世界大学ランキング、学術・言語帝国主義など）と国内要因（少子化、「グローバル人材」というコンセプト、英語信仰など）に分けて整理した。また教育の英語化に伴い、日本にくる留学生の留学動機が複雑化・多層化したこと、英語によるプログラムがグローバル人材型、クロスロード型、出島型に整理され、それらがそれぞれどのような特徴を持っているかなどをカリキュラム・教育内容の特徴や学生交流に注目しながら述べた。

最後に、英語化がもたらす正の側面（アカデミックカルチャーの変化、教員の多様化、ジェンダー・年功序列・スクールカーストの中立媒介としての役割など）と負の側面（英語格差と家庭の経済・文化資本格差、大学間格差の拡大、日本の大学のステッピングストーン化、教育の質の低下等）について述べ、英語化・学際化をふくめ、広い意味での「国際的な教育」が持つ多様な側面について議論を行った。